農林漁業用揮発油税身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

飯田垣外遺跡
火振原遺跡
梅ケ久保遺跡

1987. 10

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

農林漁業用揮発油税身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

飯田垣外遺跡
火振原遺跡
梅ケ久保遺跡

1987. 10

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

序

飯田市街地の南西部に広がる伊賀良地区は、中央アルプス山麓からの広大な扇状地上に原始・古代の昔から今日に至るまで、私達の祖先が様々な生業を営んで来た土地です。

地区内は西端の山麓部から、東端の段丘平坦面までと地形的にかなりの変化に富んだ土地柄といえます。そうした地形条件の中全域にわたって先人の足跡が残されています。その大半が、土中に埋もれた埋蔵文化財です。

伊賀良地区は市内全域の中でも屈指の埋蔵文化財包蔵地密集地であり埋蔵文化財の調査が各所で行なわれ、歴史事実のいくつかが示されています。

今回発掘調査を実施した箇所は山麓部分で最初のもので、当地区内での新しい歴史事実のひとつが示されたものといえます。

文字により残された歴史は、人々の生活のごく一部分であり、地域に根ざしたほとんどの人々の生活の跡は、その埋蔵文化財による以外知るすべがありません。

本報告書は、西部山麓地区への農道開設に起因する埋蔵文化財の調査報告書ですが、今回の調査により示された歴史事実のひとつひとつが地域史を考える一助になれば幸いです。

昭和62年10月

飯田市教育委員会

教育長　福　島　　稔

例　　言

1. 本書は、農林漁業用揮発油税身替農道整備事業（西部山麓地区）道路建設に伴う飯田市大瀬木「飯田垣外遺跡」・「火振原遺跡」・「梅ケ久保遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は長野県下伊那地方事務所からの委託を受け飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査遺跡の名称について、飯田垣外遺跡の他は当初「細田遺跡」として諸手続き等行なったが、地形等の状況から「火振遺跡」と「梅ケ久保遺跡」として本書に掲載し、資料整理についても同様遺跡名とした。
4. 発掘調査は、昭和60年度に飯田垣外遺跡と火振原遺跡の一部を、昭和61年度に火振原遺跡の一部と梅ケ久保遺跡について実施し、昭和62年度に整理作業を行なった。
5. 本書は、調査員全体で検討の上、佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行ない、小林が総括した。
6. 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行なった。なお、整理作業実施にあたり佐合英治・吉川豊・馬場保之・池田幸子・小平不二子・吉川紀美子・木下恒子・武田恵美・木下玲子が補佐した。
7. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の深さをcmで表わしている。
8. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で刃つぶし及び敲打痕を破線で、主要剥離面の打撃方向を矢印でそれぞれ実測図外側に示した。
9. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目　　次

序
例　　言
Ⅰ　経　　過 …… 1
1.　調査に至るまで …… 1
2.　調査の経過 …… 1
(1)　昭和60年度の調査 …… 1
(2)　昭和61年度の調査 …… 4
3.　調査組織 …… 5
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
1.　自然的環境 …… 6
2.　歴史的環境 …… 7
Ⅲ　調査結果 …… 9
1.　飯田垣外遺跡 …… 9
2.　火振原遺跡 …… 9
(1)　土坑１～４ …… 9
(2)　溝址１・２ …… 13
(3)　遺構外出土遺物 …… 14
3.　梅ケ久保遺跡 …… 16
(1)　１号住居址 …… 16
(2)　土坑１・２ …… 17
(3)　遺構外出土遺物 …… 18
Ⅳ　ま と め …… 20

挿　図　目　次

挿図１.　調査遺跡及び周辺遺跡位置図 …… 2
挿図２.　調査位置及び周辺図 …… 3
挿図３.　調査区位置図 …… 10
挿図４.　調査箇所土層柱状図 …… 11
挿図５.　火振原遺跡土坑１・２・３・４ …… 12
挿図６.　火振原遺跡溝址１・２ …… 13

挿図7.　梅ケ久保遺跡1号住居址 …… 23
挿図8.　梅ケ久保遺跡土坑1・2 …… 24

図　版　目　次

第1図　火振原遺跡土坑3溝址1・2 …… 22
第2図　火振原遺跡遺構外出土土器縄文時代中期 …… 23
第3図　火振原遺跡遺構外出土土器縄文時代後期 …… 24
第4図　火振原遺跡遺構外出土土器・石器縄文時代晩期 …… 25
第5図　火振原遺跡遺構外出土石器 …… 26
第6図　梅ケ久保遺跡1号住居址土坑1出土土器・石器遺構外出土土器縄文時代早・前期中期中葉 27
第7図　梅ケ久保遺跡土坑2出土土器 …… 28
第8図　梅ケ久保遺跡構外出土土器縄文時代中期中葉後葉 …… 29
第9図　梅ケ久保遺跡遺構外出土土器・石器縄文時代後期・弥生時代後期 …… 30

写　真　図　版　目　次

図版1－1　飯田垣外遺跡遠景
1－2　火振原・梅ケ久保遺跡遠景
2　火振原遺跡溝址1
3－1　火振原遺跡溝址1土層断面
3－2　火振原遺跡溝址2
4　火振原遺跡土坑
5－1　梅ケ久保遺跡1号住居址
5－2　梅ケ久保遺跡土坑1
6－1　梅ケ久保遺跡弥生時代後期土器出土状況
6－2　梅ケ久保遺跡縄文時代土器出土状況
7－1　火振原遺跡トレンチ状況
7－2　火振原遺跡土層状況
8　梅ケ久保遺跡出土土器
9　梅ケ久保遺跡出土縄文時代中期土器
10　梅ケ久保遺跡出土縄文時代中期土器
11　火振原・梅ケ久保遺跡出土土器
12　火振原・梅ケ久保遺跡出土土器

図版13　火振原・梅ケ久保遺跡出土石器
14－1　飯田垣外遺跡調査風景
14－2　火振原遺跡調査風景
15　火振原遺跡調査風景
16　梅ケ久保遺跡調査風景

Ⅰ 経　　過

1. 調査に至るまで

飯田市西部の中央アルプス山麓ぎわは、主として果樹園として活用されている一帯であり、近年の農業経営上車を使っての諸作業が不可欠の状況となっているが、その道路整備は不十分なもので、かつ、南北方向に走る主要な道路は現国道153号のみで、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区・伊賀良地区・上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。

計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農政部局においてなされ、具体的に建設へと至った。

昭和60年10月8日伊賀良地区での建設工事に先立って、長野県下伊那地方事務所耕地課・長野県教育委員会文化課・飯田市教育委員会社会教育課それぞれの担当者が現地において、用地内における埋蔵文化財の取り扱いにつき協議を行なった。その後、若干の曲折はあったが、下伊那地方事務所耕地課と飯田市教育委員会との間で再三の協議を行ない、当該地につき発掘調査を実施し記録保存を計ることとなった。

発掘調査は、各年度の事業計画に合わせ、下伊那地方事務所からの委託事業として飯田市教育委員会が、昭和60年度から昭和62年度に実施の運びとなった。

なお、今回対象とした地区より北側部分については、具体的な計画ができた段階で改めて関係者の協議を行ない、埋蔵文化財の保護策を講ずることとした。

2. 調査の経過

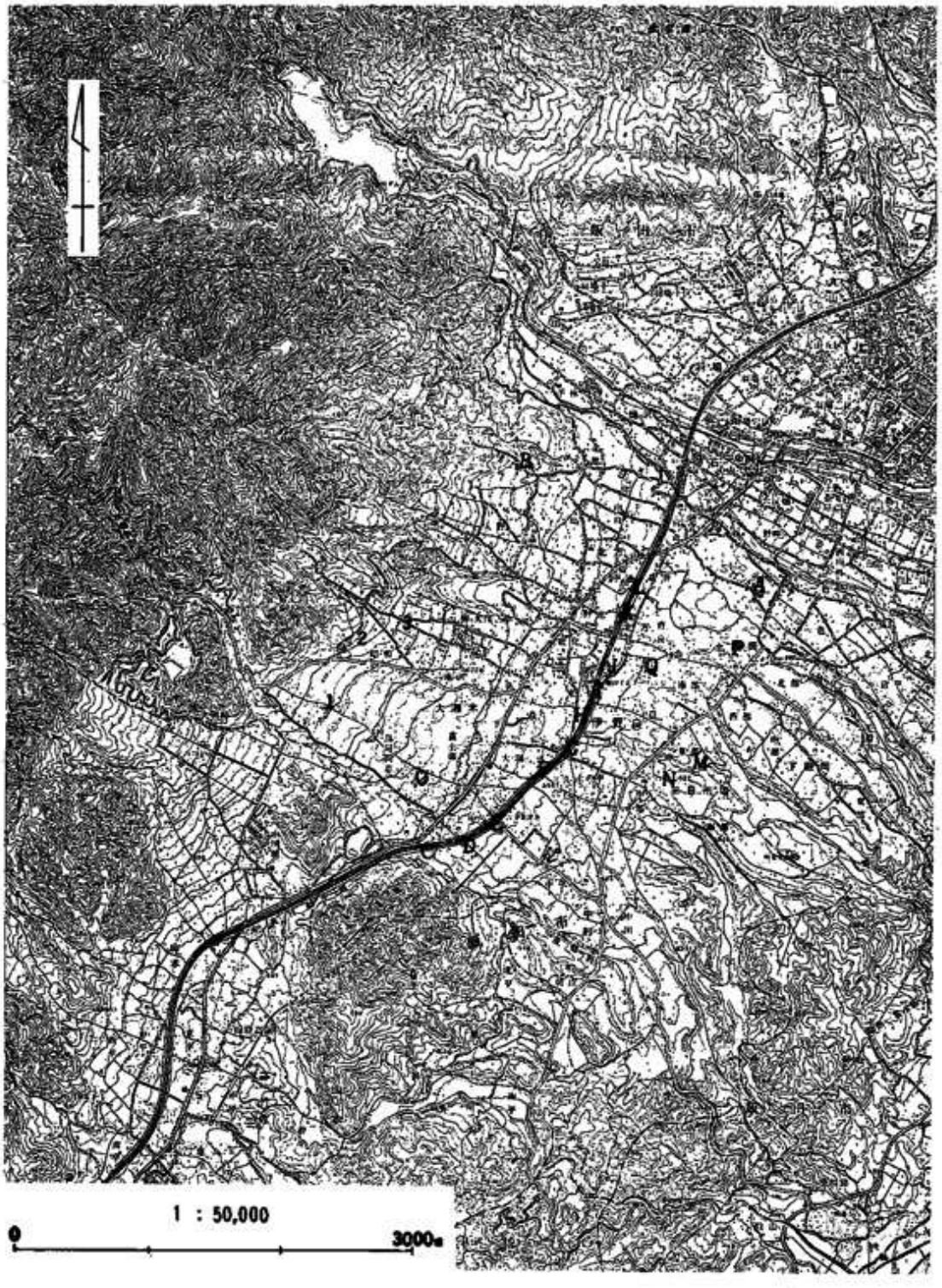
(1) 昭和60年度の調査

関係者の諸協議に基づき、昭和61年1月16日大瀬木矢抜社裏側の飯田垣外遺跡での発掘調査を着手した。

遺跡範囲内のうち矢抜社をはさむ東西両側は、すでに土盛りあるいは削平工事が進行しており、矢抜社の位置する尾根上部を主体的に調査した。

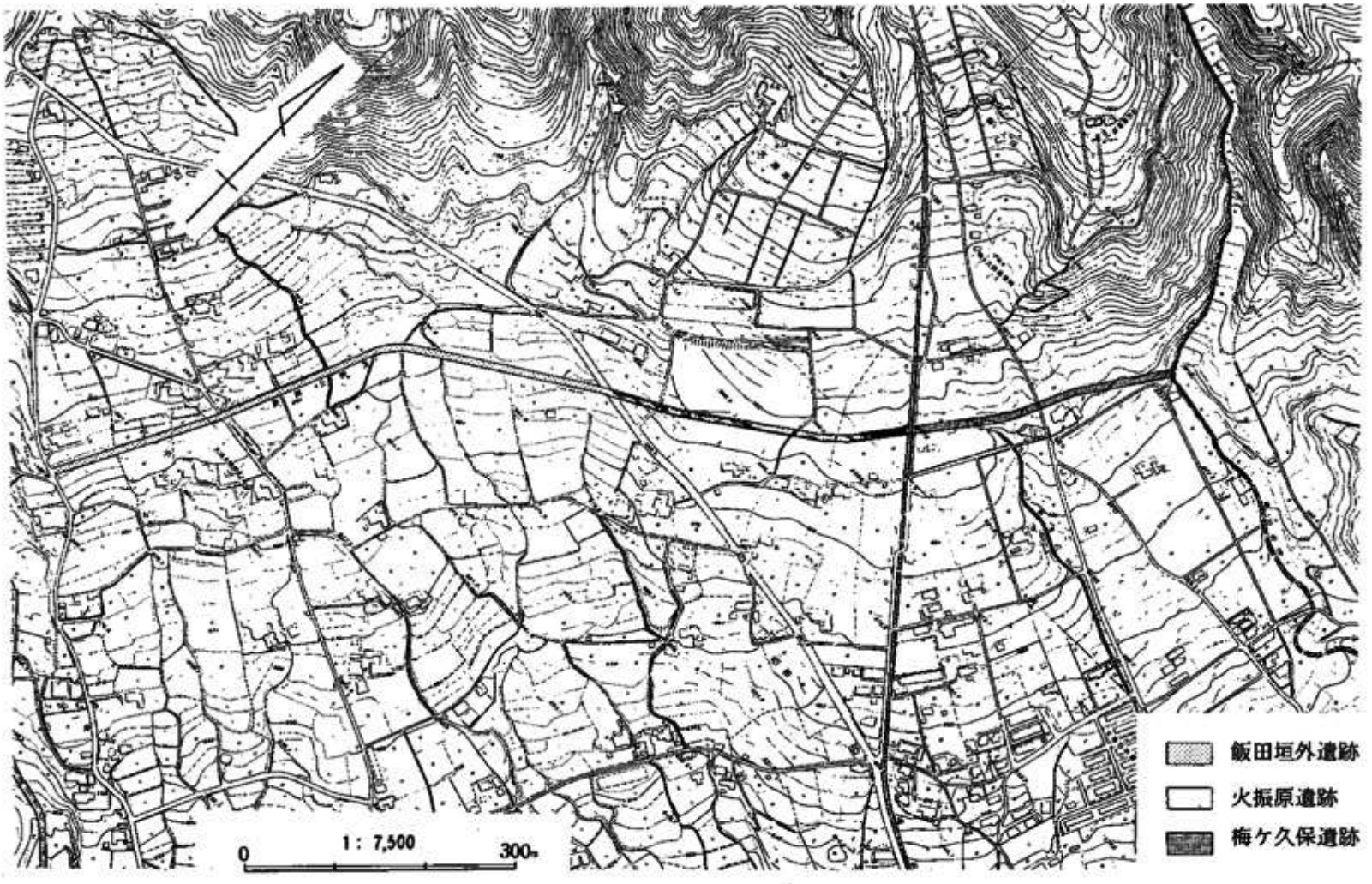
調査は、2m四方の試掘坑を地形を観察して設定し、遺構・遺物の発見があった場合に拡張しての調査を行なうこととした。

20ケ所の調査坑を設定して調査し、1～1.3m程で地山のローム層となることを確認したが、



挿図 1.　調査遺跡及び周辺遺跡位置図

1. 飯田垣外遺跡　2. 火振原遺跡　3. 梅ケ久保遺跡
A 西の原遺跡　B 立野遺跡　C よ志原遺跡　D 上の平東部遺跡　E 寺山遺跡
F 六反田遺跡　G 大東遺跡　H 酒屋前遺跡　I 滝沢井尻遺跡　J 小垣外(辻垣外)遺跡　K 三壷淵遺跡　L 上の金谷遺跡　M 中島平遺跡　N 宮ノ先遺跡
O 鳥屋平遺跡　P 殿原遺跡　Q 小垣外・八幡面遺跡



挿図 2.　調査位置及び周辺地図

遺物の出土は皆無であり拡張しての調査は行なわないこととした。

なお、現状が水田で湿地状を呈する東側は調査予定外であったが、工事の掘削による断面に黒色の落ち込みが確認されたが、残存部が用地外のため調査は行なわなかった。

引き続き、火振原遺跡の調査に着手した。

調査方法は、飯田垣外遺跡同様に試掘坑を設定し、その調査結果に基づき拡張して調査することとしたが、試掘坑からの出土遺物は黒曜石1点のみであり、拡張しての調査は行なわなかった。

本年度の調査は2つの遺跡ともに具体的な遺構・遺物の発見はなく、道路建設範囲は遺跡の範囲外であると判断された。

なお、厳冬期の調査であり、猛烈なふぶきが襲うこともあり、作業実施は大変であった。

(2) 昭和61年度の調査

前年度の調査に引き続き、昭和61年10月14日、火振原遺跡の調査に着手した。

なお、本年度調査範囲は全体が細田遺跡として諸手続きを行なったが、地形等の判断から滝沢川までを火振原遺跡とし、それ以北は梅ケ久保遺跡とすることとした。

まず、前年度調査地点から約100㎞離れた果樹園の中に試掘坑を設定し、順次東方へ進行する形で調査を実施した。

滝沢川南側の果樹園内からは、各試掘坑内から縄文時代中期・後期・晩期の土器片が出土し、各種の遺構の存在が予想され、ローム層中に黒色土の落ち込みを確認した試掘坑周辺を拡張して調査を行なった。

それらの遺構について写真撮影・測量調査等を行ない作業を完了した。

滝沢川南側部分は、地形的にかなりの傾斜地にあるため、遺跡の中心は調査地点の両方もしくは東方一帯にあると判断された。

なお、調査時点において、果樹園の棚等がそのままであり、かつ、昭和36年の集中豪雨による土砂（砂礫）の堆積が厚く、作業進行に支障をきたすこともあった。

その後、滝沢川北側部分の果樹園の棚撤去を待って11月に入り再度調査に着手した。

梅ケ久保遺跡は、路線内でかなりの起伏があり、微地形は所々で異なっており、それぞれの地形に合わせた試掘坑を設定し調査進行した。

その結果、量の多少はあるが全体にわたり土器片等の遺物が出土し、特に北端部において縄文時代中期の遺物が集中して出土した。それに基づいて拡張して調査を行なった結果、弥生時代終末の竪穴住居址1軒と縄文時代中期の土坑を検出した。

それらの写真撮影・測量調査を終え本年度調査も完了した。

昭和60、61年度の現地での発掘調査を受け昭和62年度において、本発掘調査報告書刊行のため整理作業を行なった。

3. 調 査 組 織

(2) 調 査 団

調査担当者　小林正春

調 査 員　佐々木嘉和　佐合英治　桜井弘人　山下誠一　吉川豊

作 業 員　西尾茂人　木下当一　高橋収二郎　溝上清見　下平米一　細田七郎　若林太吉　木下傳　木下喜代恵　正木実重子　木下和子　原さよ子　中平隆雄　吉川紀美子　池田幸子　小平不二子　木下恒子　佐藤いなゑ　田口さなゑ　吉川千恵　清水与智光　横井近枝　深尾由香　窪田多久三　森　章　大島利男

(2) 事 務 局

飯田市教育委員会　社会教育課

塩沢正司　（社会教育課長）

池田明人　（社会教育課文化係長）

小林正春　（　〃　文化係）

吉川　豊　（　〃　）

土屋敏美　（庶務課）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西２～４㎞に位置し、西半は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上にあり、東半は天竜川河成段丘の中段上にあり、両者が連続した地形上に立地し旧伊賀良村に該当する。飯田垣外・火振原・梅ケ久保遺跡は東半の扇頂部に立地し、大瀬木地区に所在する。

大瀬木地区は南西側が茂都計川を境として山本地区に、北東側が南沢川支流の谷を境として北方地区に、南東側が国道153号線付近を境として中村地区に接している。

大瀬木地区の土地利用状況を見ると、南西部及び国道153号線の南東側は主に水田地帯となり他の大半は果樹園となっている。また、地区のほぼ中央に大きな住宅団地があり、周囲に宅地が広がりつつある。

今回調査した遺跡は標高650～700ｍで扇状地の山際に連続して位置し、それぞれの遺跡は本来連続する扇状地が滝沢川などの小沢川に切られた地形上に立地する。

遺跡毎に微地形をみると、飯田垣外遺跡は茂都計川寄りの水田地帯で、南東向の緩斜面に段々の水田の一画に立地する。水田造成の折削平された部分と埋土された部分がありローム面までの深浅が著しく、ローム層まで削平された箇所もある。北東側は市道を境に火振原遺跡に接する。

火振原遺跡は果樹園地帯で、遺跡の中心は今回調査地点より西方の斜面上段の平坦部にある。北東側は滝沢川を境に梅ケ久保遺跡に接する。滝沢川は昭和36年梅雨前線による集中豪雨で大災害を起している。川から№47中心杭付近まで災害時の黄色砂礫土のかぶりがある。ローム面まで１～２ｍの堆積があり土坑１～４、溝１・２はローム面で検出した。№48中心杭付近は黄色砂礫層が非常に厚くなり、場所によって地表からローム面までの深さに差がある。

梅ケ久保遺跡は果樹園地帯で、滝沢川の堆積による小扇状地である。調査区は南東向の緩斜面を横切っている。№50中心杭付近は36災害時に滝沢川の本流が通った場所とされ、地表１ｍ下あたりに30㎝前後の岩石が混入している。№52中心杭付近はやや東へ向く斜面になる。深さ160㎝余調査したが、漆黒色土、黄褐色土、黒色土が連続堆積しており、水害等による地形の成因が考えられる。黄褐色砂層中間より弥生時代後期初頭の土器片が出土したが、砂層中でありこの地点より上方の山際に該期遺構が存在すると思われる。№52中心杭やや北よりから市道までの間は小沢川の侵食により微地形は複雑に変化する。ＳＰ５付近に小台地があり南西は災害による小崖面が残され、地表から３ｍ下まで土層を確認した。この崖に切られた台地は北東に傾斜し凹地となり、凹地底に小川がある。小川から市道まで比較的急傾斜で２ｍの比高差を持つ。市道から№58中心杭付近まではほぼ

平坦でその北東側は山林・竹藪となり、緩斜面で比高を下げる。№58中心杭付近は耕土下に40㎝前後の漆黒色土層がある。縄文時代中期中葉の藤内式土器がこの漆黒色土中から出土した。1号住居址など遺構は約1㎞下のローム面に検出した。

以上記したように、山麓部に接した立地条件下において常時水害等の危険はあるにせよ、それにも増して自然の恵みを始めとする生活利点の多さが各時代の人々が連綿と生活を営み得た地として、本遺跡群周辺を位置づけることができる。

2. 歴史的環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といって良く99遺跡を数える。調査がなされた遺跡は学術調査による西の原遺跡（注1）・立野遺跡（注2）、中央自動車道にかかる調査でよ志原・上の平東部・赤山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺淵・上の金谷各遺跡(注3)・諸開発に伴ない中島平（注4）・宮ノ先（注5）・酒屋前（注6）・鳥屋平（注7）・殿原（注8）・八幡面・小垣外（注9）各遺跡などである。

縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地区といえる。

特に立野遺跡は戦後間もなくから数度の調査がなされ（注2）、「立野式土器」の標式認定により、長野県を代表する縄文時代早期の遺跡である。しかし、遺跡は耕地整備・土取り工事等により煙滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴なう各遺跡の調査では各期の住居址等が検出され扇状地中央の遺跡状態が明確にされた。

伊賀良地区内の古墳は52基（注10）が数えられているが、現存するものは数基である。今回調査の梅ケ久保地籍に、梅ケ久保古墳（注11）一基の記録がある。調査地点より山寄りで標高700㎞の位置にあり、飯田市内の古墳の内で最高位に近い古墳であるが、現在は位置の確認もできない状態である。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名がある。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるがその所在は確認されていない。伊賀良地区内のどこかにあると思われ、その位置については諸説がある。諸説共に中央自道車道から南東側の扇状地端部にかけて設定されている（注12）。

中世に入ると伊賀良庄の記録（注12）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が、北条時政で江馬氏が司り、北条氏滅亡後は小笠原氏の所領となり（注13）、小笠原氏繁栄の基盤のひとつとなった地区である。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観すれば広大で肥沃な地であり、原始より古代・中世・近世・近代・現代と大いに栄えた地ということができる。

今回調査の飯田垣外・火振原・梅ケ久保遺跡は包蔵地として遺跡登録されており、すべて表採資料と思われるが、押型文土器から須恵器まであり遺物包含の多い所とされている（注10）。

（佐々木嘉和）

注

1. 伴信夫・宮沢恒之　1967「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
2. 神村透　1968・69「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号
   神村透　1982「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
3. 岡田正彦ほか　1972『中央道調査報告一飯田市内その2一』長野県教育委員会
4. 佐藤甦信　1977『伊賀良中島平』飯田市教育委員会
5. 佐藤甦信　1978『伊賀良宮ノ先』飯田市教育委員会
6. 佐藤甦信　1983『酒屋前遺跡』飯田市教育委員会
7. 佐藤甦信　1983『鳥屋平』飯田市教育委員会
8. 佐藤甦信　1987『殿原遺跡』飯田市教育委員会
9. 佐藤甦信　1987年度　報告書刊行予定　飯田市教育委員会
10. 長野県県史刊行会　1981『考古資料編一遺跡地名表』
11. 市村咸人　1955『下伊那史』第2巻下伊那誌編纂会
12. 市村咸人　1961『下伊那史』第4巻下伊那誌編纂会
13. 宮下操　1967『下伊那史』第5巻下伊那誌編纂会

Ⅲ 調 査 結 果

発掘に先立って、地表面の遺物散布状況を調査したが、果樹園の深耕が入っているにもかかわらず、皆無であった。この事から遺構検出度は少ないと判断し、試掘グリットを入れ遺構を検出した地点を拡張する事とし、調査を行なった。

調査において確認された遺構等調査結果は次の通りである。

1. 飯田垣外遺跡

調査区の延長650 *m* と調査範囲は今次調査において最大であるが、遺構・遺物の出土は皆無であった。

調査着手前において、その地形等により、矢抜社のある尾根上はその南北が低くなる尾根状の地形で、以前からの遺物出土状況でも縄文～弥生時代にかけての大きな遺跡の一画を成すと考えられた。

しかし、調査の結果、前述のとおり1片の土器すら出土せず、遺跡の中心は調査地点の西方及び東方に存在したものと考えられる。

2. 火振原遺跡

当初、細田遺跡とした箇所を含み、調査区の延長300 *m* で試掘グリットを30箇所、トレンチを2箇所入れ、遺構を検出拡張して次の遺構を調査した。

(1) 土坑　　4基

(2) 溝址　　2

1) 土　坑

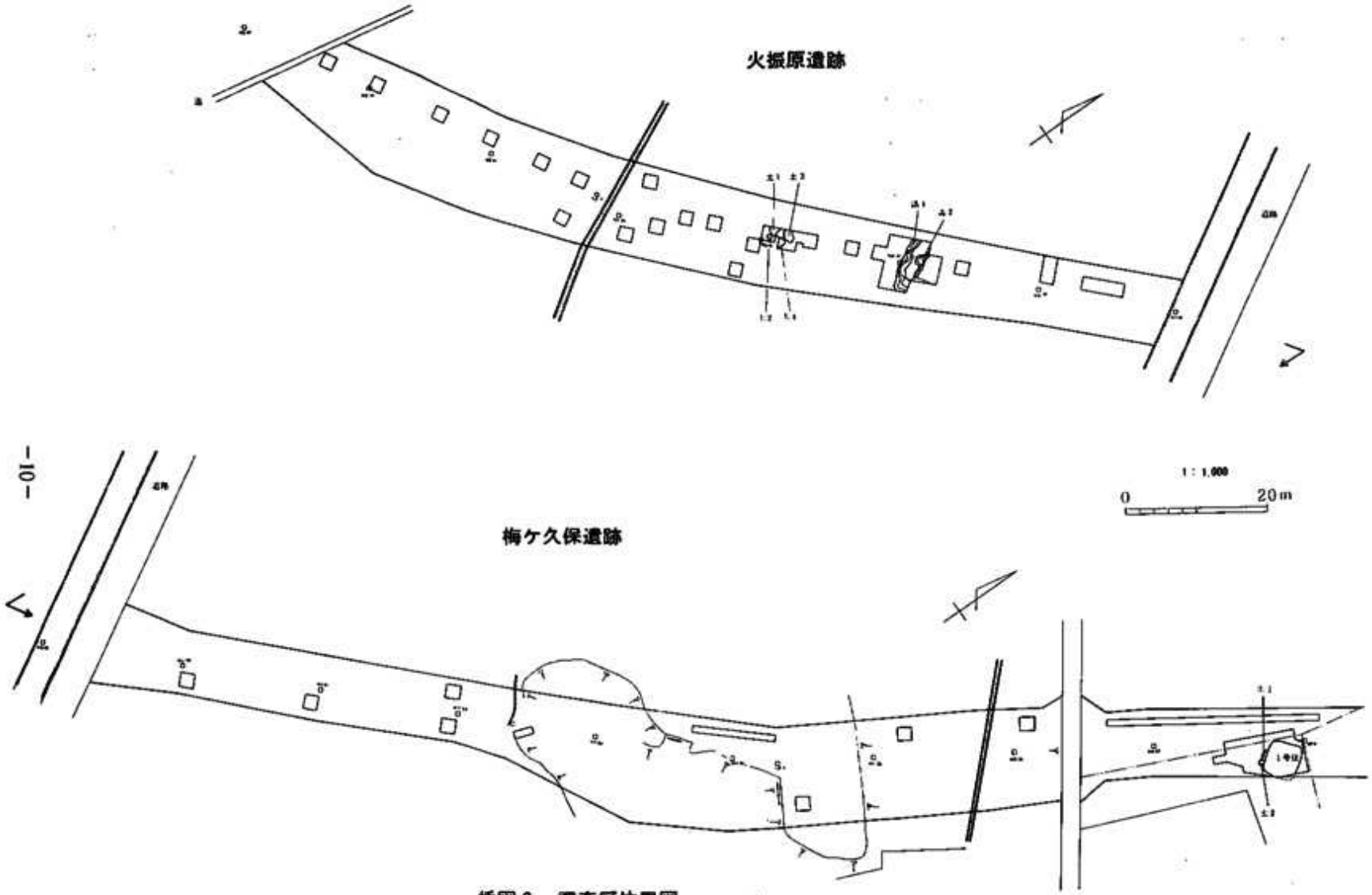
(1) 土坑1　（挿図5）

遺構　調査区のほぼ中央No.46中心杭付近に検出した。ローム面に約10cm掘り込みを確認し、黒色土中から掘られたもので、1.5×1 *m* の不整形で把えられた。長軸はN 40.5° Wを示し、覆土には黒色土が入っており、底部に凹部がある。

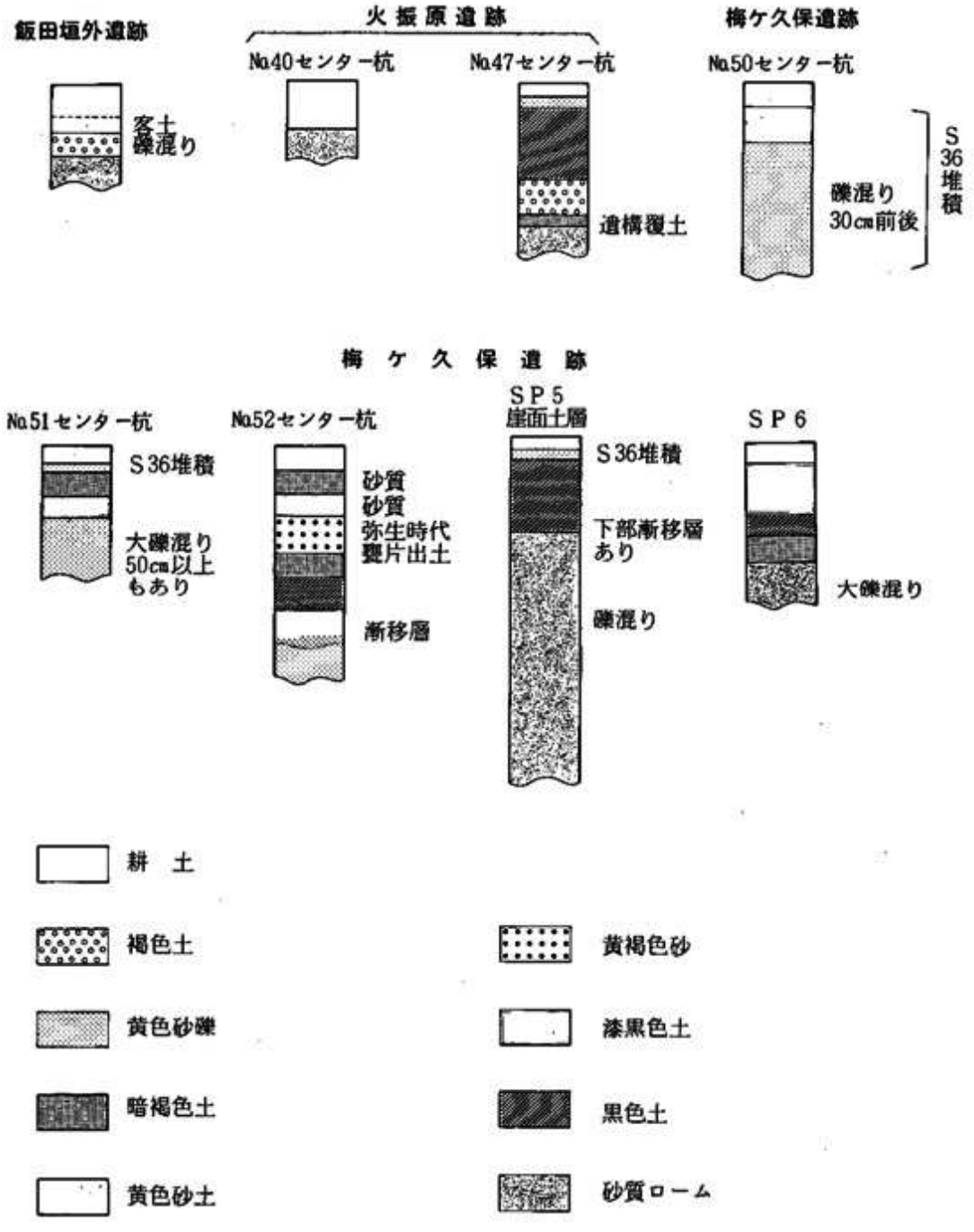
遺物　極小さな土器片のみであり、時期・性格共に不明である。

(2) 土坑2　（挿図5）

遺構　土坑1の南側に検出した土坑で、ローム面から約15cm掘り込まれている。土坑1同様に黒色土中から掘られ0.8×0.5 *m* の不整楕円形を呈し、長軸はN37°Wを測る。覆土は黒色土が



挿図 3.　調査区位置図



挿図4.　調査箇所土層柱状図

入っていた。

遺物　極小さな土器片のみである。

時期　性格共に不明である。

(3)　土坑３　（挿図５、第１図）

遺構　土坑１の北東側に検出した。土坑１・２同様に黒色土中から掘られ1.3 *m*の不整円形を呈し、ローム面から20㎝前後を測る。底に多数の凹部があり、覆土は黒色土が入っていた。

遺物　土器（第１図）石器（同図２～５）がある。１は条痕文土器で黄褐色を呈しており縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる。２は緑色片岩製の打製石斧であり使用による磨滅が著しい。３は褐白色のチャート質と思われる石で尖頭器の破片であろう。４・５は黒曜石の剥片で側縁に刃こぼれ状の小剥離痕が認められる。

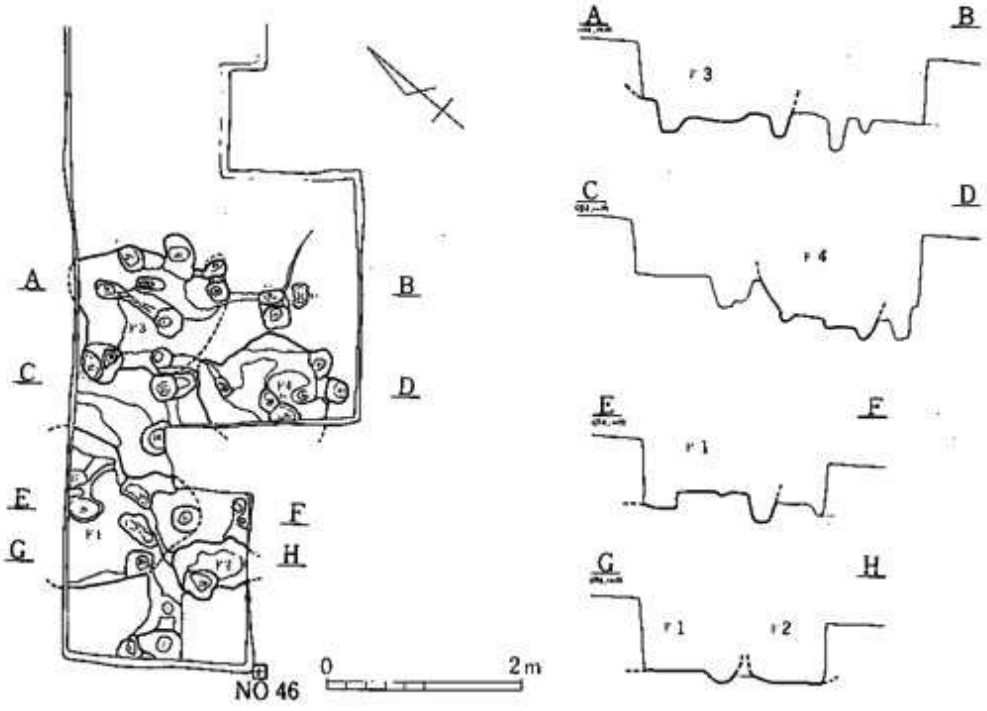
時期は土器片から縄文時代晩期末～弥生時代初頭と思われる。

遺構の性格は不明である。

(4)　土坑４　（挿図５）

遺構　土坑３の南側に検出し、他の土坑同様に黒色土中から掘られ 1.3 *m*の不整円形を呈する。ローム面から20㎝の深さを測り、覆土は黒色土であった。底部には凹部がある。

遺物　出土遺物は無く、時期・性格共に不明である。

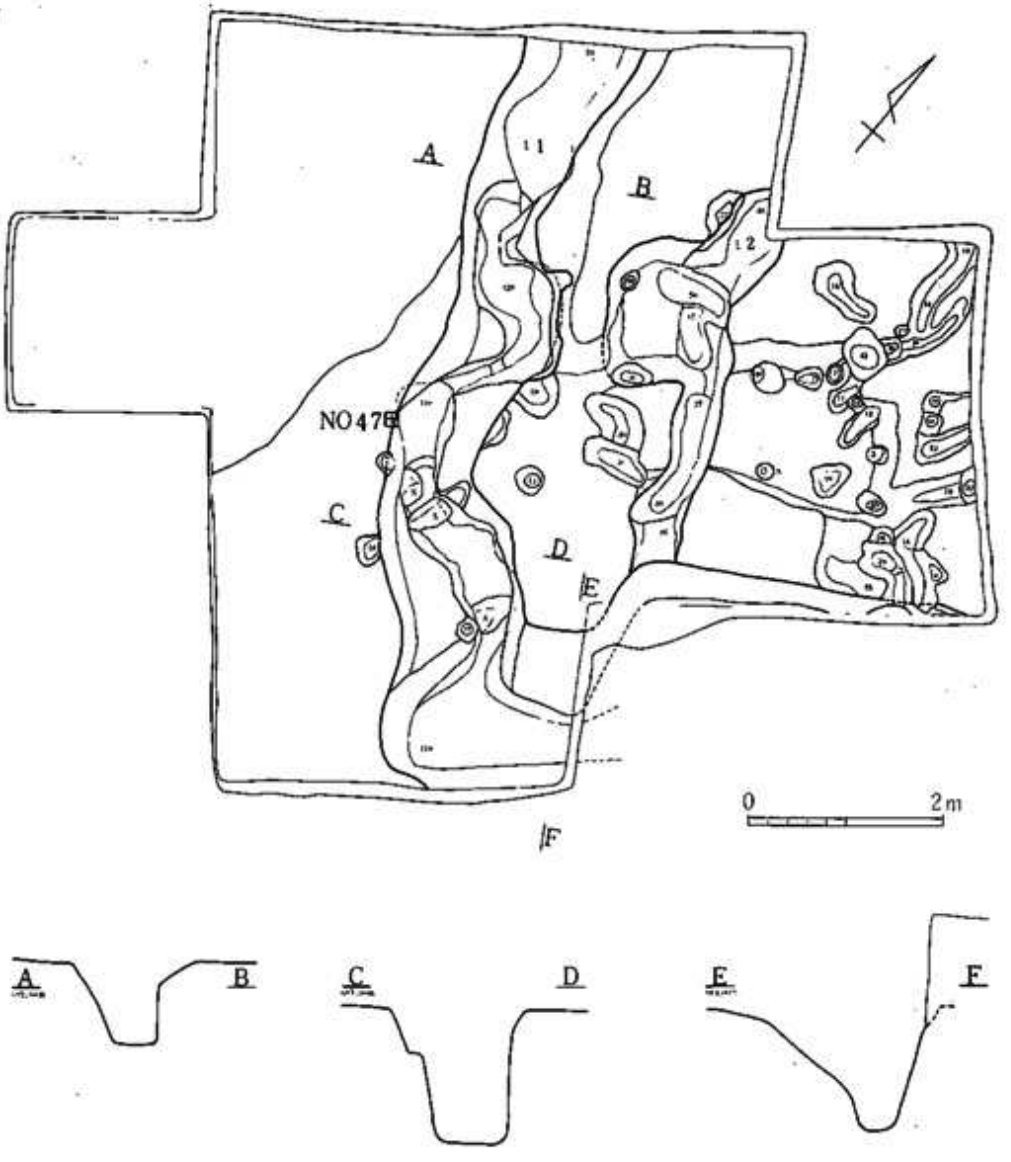


挿図５．火振原遺跡土坑１・２・３・４

2) 溝　址

(1) 溝址１　（挿図６、第１図）

遺構　No.47中心杭付近に検出した。路線にほぼ直交して約８ｍを確認し、長軸N30°Wを測る。南東側用地境近くで、北東に直角に近く方向を変える。巾0.8～1.5ｍ深さは0.9～1.3ｍを測り断面形は箇所により変化はあるが総体にU字形を成している。水の流れによってローム層の下、黄色砂層（大礫混り）まで浸食され大きな岩石が露出している。覆土は上層に褐色土、中



挿図６.　火振原遺跡溝址１･２

層に褐色砂、下層に砂利（礫混り）が入っていた。

調査範囲内の下方で直角に近く曲っているが、自然流路の特徴がみられ、斜面における何らかの要因が水路そのものを蛇行させていると考えられ、本溝址全体も不明であり、自然流路と考えるのが妥当である。

遺物　土器（第１図６～12）石器（同図13・14）が出土している。６は縄文時代前期に比定できる羽状縄文土器で、繊維は含まれておらず焼成やや軟らかく胎土も粗い。７は半裁竹管による平行沈線が施文され、中期初頭に位置づけられる。８・９・10は中期後葉に比定できる。11は網代痕を持つ深鉢底部片で後期に位置づけられる。12は条痕文土器で、第４図６・７と同一個体である。縄文時代晩期末から弥生時代初頭に位置づけられる。13は硬砂岩製の横刃型石器で刃部にわずかな光沢が認められるが、弥生時代の石器に見られる様な顕著なロー伏光沢ではない。14は硬砂岩製で刃部に磨滅痕が認められる。

遺物はすべて流れ込みであり、堆積土層個々に時代把握は不可能であり各時代遺物の混在が認められ、遺物による本址の時代決定は困難であるが、最も新しい時代の遺物から埋没時期は縄文時代晩期末～弥生時代初頭頃と考えられる。

(2)　溝址２　（挿図６、第１図）

遺構　溝址１の北東側に検出した溝址で、長さ約４ｍを確認した。巾は一部広い部分もあるが50cm以下、深さは30cm以下と浅い。覆土はほとんどが砂礫のみであり、一部に褐色土が入っていた。状況からみて自然の水路であろう。

遺物　第１図15～17が砂礫中から出土しており、15は縄文時代後期に比定できる。16は条痕文土器片で、第４図、８と同一個体である。17は硬砂岩製で刃部に磨滅痕が認められる。

土層・遺物から判断して埋没時期は溝址１と同時期と考えられる。

3)　遺構外出土遺物　（第２～５図）

遺構を検出したグリット及び拡張したグリットでは、黒色土・褐色土中から比較的多くの遺物が出土した。小破片・無文のため図化しなかった遺物も多い。

(1)　縄文時代中期土器　（第２図）

１は鉢型土器の口縁無文部の破片で現存10cm強である。器面は内外共に篦状工具により、ていねいに横ナデされている。

図化可能な口縁片は少なく２・３のみである。

４は土製品の破片であり沈線と細く尖った刺突具により施文される。全体形は小破片のため確認できないが、該期に普遍的にみられる土偶の一部とは考えられず三角柱状の土製品など特殊な形態を示す可能性もある。外面は黒褐色で、胎土はやや粗く小石粒が多量に混入している。

５～15は深鉢形土器の胴部破片で、他の遺物同様に中期後葉に位置付けられる。

(2) 縄文時代後期土器　（第３図）

後期の土器片には、深鉢形土器・浅鉢形土器などいくつかの器種がある。

１は深鉢の口縁部で現存部に施文はなく、内外面に雑な横箆磨きが施される。

２は１と同器形と思われるが縦横の沈線が施されている。

３は装飾突起で器壁から剥落しており、表面は箆ナデで調整している。

４～８は浅鉢の口縁ないし口縁部近くの破片であり、５・６は内面に沈線と縄文を施す。

９～13は壷形土器あるいは注口土器と思われるが、小破片のため全体の器形の確認はできない。

14は小形深鉢土器で無文である。

15～18は網代痕を持つ底部片であり、19は箆削り後ナデである。

各土器片共に無文の部分は箆磨きされ縄文を消しているものもある。焼成は各土器片共に良く焼締り堅緻である。時期的には後期全体に及び主体は加曽利Ｂに位置づくものと考えられる。

(3) 縄文時代晩期～弥生時代初頭土器　（第４図１～10）

図化可能な土器片は10点であった。口縁部は１～３であり、１の端部に貝殻腹縁によると思われる沈文が施される。

２は波状口縁になると思われ、端部に凹みがある。内外面胎土共に黄白色で、焼成も軟らかく器面が荒れ、他の９点と異なっている。

３は端部に半裁竹管によると思われる半円形のきざみ目を持つ。

４～８は胴部の破片で全体に条痕文が施されており、6･7は同一個体で溝址１の12も同一個体である。８は溝址２の16と同一個体である。

９は底部近くの破片で下半分の条痕文が乱れている。遺構出土遺物と合わせ、総体に縄文時代末から弥生時代初頭に位置づけられる。

(4) 時期不明土器　（第４図11）

第４図11は底部がわずか残っており、胴部の立ち上がりは極端に薄くなる破片である。外面は櫛歯状を呈する箆状工具による調整痕を残しており、内面は凹凸が残る横ナデである。調整の方法は異なるが痕跡は平安時代の甕に似ており、平安時代の可能性もある。

他に無文土器片が相当量あるが、いずれも縄文時代中期から晩期にかけてのものと考えられる。

(5) 石器　（第４図12～14・第５図）

遺構外から出土した石器の内、小破片を除きすべて図化した。打製石斧の完形品は第４図12・13のみで、他の８点は破損している。

材質は緑色片岩製が第５図１・２・３の３点で、他は硬砂岩製である。刃部に磨滅痕を残すものと基部にも認められるものがあり、基部の使用も考えられる。８は緑色片岩製で打製石斧の凸部を磨いたという感じの粗製磨石斧である。９～11は硬砂岩製の横刃型石器である。９は小型で２次調整がていねいに施されている。12は緑色片岩礫の周辺に使用痕が著しく残っており、敲打器である。13は黒曜石製の剥片石器である。

いずれも、時期の特定は困難であるが、伴出土器から縄文時代中期から晩期に属するものと考えられる。

3. 梅ケ久保遺跡

調査区延長は300 m弱であるが、調査が困難な山林・竹藪が120 m含まれており、この部分を除いた170 mに10箇所の試掘グリットと3本のトレンチを入れ、遺構検出区を拡張する調査方法で実施し、次の遺構を調査した。

1) 住居址　1軒

2) 土　坑　2基

1) 住　居　址

(1)　1号住居址　（挿図7・第6図）

遺構　調査区山林際に検出、東隅が一部用地外にかかったが、ほぼ全体調査した。

隅丸方形の竪穴住居址で規模は5×4.5 m、主軸方向はN26°Wを測る。

覆土は上部に漆黒色土が入り、床面近くに黒土が入っていた。

壁高は30～10cmを測り、やや緩く立ちあがり、壁下の一部に周溝があったが深さは5cm以下と浅い。

床面は北西から南東にやや傾斜しており、砂質のロームで地山の石が露出している。平面図の二点鎖線で囲んだ部分は固く良好であるが、中央から北隅にかけてやや軟らかい。

主柱穴は4本を確認し、深さは50～40cmを測る。主柱穴P_1・P_3の中間に浅い穴があり、間仕切りあるいは支柱と考えられる。

南東壁南隅近くに、周囲をやや高め土手状縁部にした穴があり、入口施設と考えられる。

西南壁下周溝にかかっている穴は1号住居址が切っており、土坑1の掘り方である。縄文時代中期中葉の遺物が出土した。

炉はP_1・P_2の中間でやや中央寄りにあり、凹みとわずかの焼土が検出されたのみである。周囲に荒れた部分もなく、掘り凹めただけの地床炉であろう。平面図で炉の横にある石は地山の石の一部が露出したものであり、炉の施設ではない。炉と北西壁との中間床面に、少量の焼土が散布していたが、性格等不明である。

遺物　（第6図1～3）

グリット拡張時から比較的多くの遺物が出土したが、ほとんどが縄文土器片であり、耕土下の漆黒色土中からの出土である。

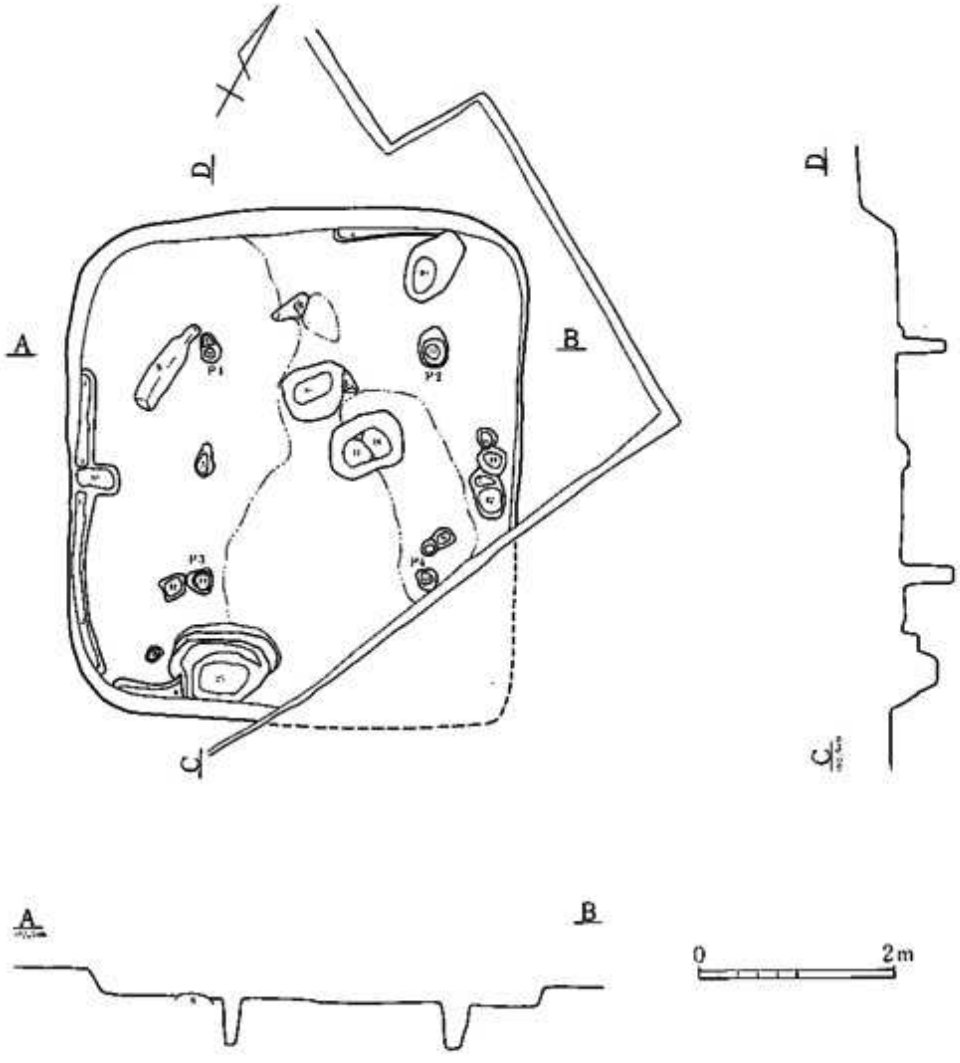
図化可能な遺物は第6図1～3のみで、他に20余点の土器の小片が出土している。

1は高坏の坏部で、内外共に篦磨きが施されている。

2は緑色片岩製の打石斧の破片であり、黒色土中から出土しているが、1号住居址に伴なうか断定できない。

3は砂岩製の砥石であり、大型で3面に擦痕が残っている。本住居址に伴なうと考えられる。

時期は、遺構形態・出土遺物から弥生時代終末もしくは古墳時代前期に位置づけられる。



挿図7. 梅ケ久保遺跡1号住居址

2) 土　　坑

(1) 土坑1　(挿図8・第6図)

遺構　1号住居址の南西壁にかかって検出したが、半分以上切られている。土坑としたが掘り方が整っておらず、具体的な性格等不明である。把握した規模は1.4×1mで覆土は褐色土で

あり、最深部は40cmを測る。

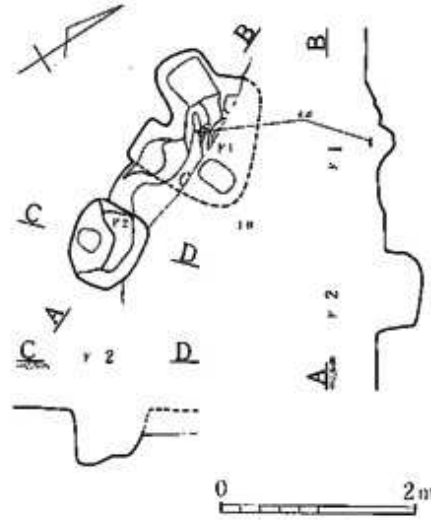
遺物　第6図4の小形深鉢形土器片が出土している。同一個体片は1号住居址覆土中にも包含されていた。実測図は図上復元であるが、口縁部は約半分現存する。施文は口縁部と胴部の2箇所で、口縁部の3箇所に装飾の突起部があり波状口縁を成している。口縁3箇所の突起部は、長楕円形の隆帯を八の字形に貼付する。八の字の下方にV形の下垂する収束部を作り、2段の短い隆帯で括る。胴上部の隆帯は左右から来た粘土紐を並べて下垂し、ブリッジ状に持ちあげ耳を成しており、3箇所の耳が考えられる。隆帯の付近には角形文（山形連続刺突文）を施し飾っている。器面内外に炭化物が付着しており、内面は著しい。

時期は縄文時代中期中葉、藤内Ⅱ式併行の土器と思われ、該期の遺構であろう。

(2)　土坑2　（挿図8・第6図）

遺構　土坑1の南側に検出し、1号住居址に切られる。規模は0.8×0.7mの不整方形で、深さは0.5m前後を測り、褐色土が入っていた。

遺物　第7図1・2の破片が出土しており、1号住居址の覆土中遺物・グリット出土遺物と接合した。土坑2に埋設されていた土器が後世の遺構・撹乱などにより散逸したものと思われる。1は蛇頭装飾把手をもつ大形の深鉢形土器片で、想定の大きさは口縁直径40cm、器高は60cm前後と思われる。現存部の文様構成は、口縁から突出して蛇頭が付き、口縁下に半肉彫の円文・三叉文などを組合せ、その下に庇状に突出する隆帯で区画する。隆帯の一区画に、凹部3箇所を作り上面と端部に、篦状工具による連続平行刺突文を施す。区画内には、沈線による変形渦文を施す。胎土はやや粗く微石粒・茶褐色粒を多量に含むが、焼成は良く堅緻である。



挿図8. 梅ケ久保遺跡土坑1・2

時期は、土器が縄文時代中期中葉藤内Ⅱ式に比定でき、土坑1と同じく該期の遺構であろう。

(3)　遺構外出土遺物　（第6・8・9図）

縄文時代早・前期の繊維土器から、弥生時代後期の土器まである。

(1)　縄文時代早期繊維土器（第6図5～7）、図化したもの4点と他に小片が2片出土しており、1片は7と同一個体である。

5は器壁厚く繊維の量は少ない。器面の調整は内外面共に篦状工具でナデているが、雑で凹凸が残る。口縁際は横ナデでそれ以下は縦ナデと斜ナデである。口縁は緩い不規則な波状になると思われる。胎土は細かく良好で、焼成も堅く良好であり、内外面共に淡褐色である。

6は器面に粗い撚糸文が施されている。内側は剥げており厚さ調整痕は不明である。胎土に

は少量の繊維と小石粒が混入されている。焼成はやや軟らかく器面は磨滅しており、茶褐色を呈している。

7の器壁はやや薄く繊維の量は多い。器面には浅い沈線と刺突文がある。3個体共に小片のため器形等不明であるが、いずれも早期末に位置づくと考えられる。

(2) 縄文時代中期土器　（第6・8図）

中葉に比定される土器が、該期の土坑1・2周辺と1号住居址覆土及び床面下から出土した。

第6図8～11は藤内Ⅱ式に比定できる。8は口縁部片で波状口縁になると思われ、平行沈線の下は半肉彫で文様を浮かせている。11は沈線文が収束しており底部際であろう。

第8図1は全面に縄文を施し、折り返しの波状口縁をもち、器壁は薄く良く焼締っている。

2～11は半裁竹管による平行沈線を持つ土器片で、平出Ⅲ類Aに比定ができる。2の器壁は非常に薄く、胎土は細かいが小石粒が目立つ。口縁は折り返してあり波状口縁になると思われ、半裁竹管による平行沈線・押引き・押圧である。3は波状口縁の突出部片で頂部から下垂する隆帯に指頭押圧を施す。4の縦平行沈線は押引きである。5は隆帯を指頭でつぶし、半裁竹管で短い平行沈線を施す。6は隆帯で区切り平行沈線を施し、直線の隆帯を篦状工具で連続押圧している。

7は隆帯で区切り半裁竹管の押引きで埋める。隆帯上に半裁竹管の平行沈線・押引き・刺突を施す。8は隆帯に指頭押圧を施す。2～8の胎土は良く似ており、細かな粘土にやや粗い小石粒が白く目立つ。焼成は良く淡茶色ないし淡褐色に焼けている。9～11は同一個体で平行沈線を施す。胎土はやや粗く小石粒・雲母を多量に含んでおり、焼成は良い。

12～15は中期後葉に位置付くと思われる土器片である。

(3) 縄文時代後期土器　（第9図1～6）

図化可能なものは6点であった。1・2は同一個体の可能性もあるが、内面色調にはかなりの差がある。太い沈線で施文しており、胎土は良好であるが3㎜前後の石粒が目立つ。焼成は堅く良好である。

3～5の施文は同様であるが、4は縄文施文部がない。縄文を全面施文後、沈線により区画し一部を磨消している。いずれも焼成は良好である。6は網代痕を残しているが、ラフな網目である。

いずれも、後期前半に位置づくと考えられる。

(4) 弥生時代後期土器　（第9図7・8）

中心杭No.52の西側グリットから、7・8の弥生時代後期の甕が出土した。出土層は挿図1柱状図の、黄褐色砂層中で地表から約80㎝下である。自然的環境の項で触れたが、この黄褐色砂層は氾濫堆積した砂であり、遺物も混入したもので、該期かそれ以後に大規模な氾濫がありその堆積土中に包含されたものと考えられる。7は口縁部を欠くが頸部に、一周すると思われる波状文と胴部に斜走波状文が施されている。内面は凹凸が残るが横篦磨きで調整してあり、器

壁は薄く、堅く焼き締められている。

(5) 石　器　（第9図9～13）

遺構外から出土した石器はすべて図化した。5点共に中心杭№57からSP 6間のトレンチないし拡張部から出土した。9は砂岩製の砥石で3面に擦痕が残る。10は輝緑凝灰岩製の打製石斧であり、12は緑色片岩製の打製石斧片である。

個々の時期は特定できない。

Ⅳ　ま　と　め

中央アルプス前山の山麓に位置する、飯田垣外・火振原・梅ケ久保遺跡の調査を行なったわけであるが、広域農道の路線という制約された範囲内であり、広大な遺跡の極一部を調査したのみである。今回の調査結果で遺跡全体の様相把握には至らないが、一端を把え得たことも事実であり、それらのいくつかを整理すると以下のようである。

飯田垣外遺跡では遺物・遺構の検出はなく、包蔵地はやや山寄りの西方もしくは東方に求められる。

今回の道路建設によりその中心部からはずれたことは文化財保護の点から望ましいことであったといえる。

火振原遺跡においてはわずかであるが遺構の検出があり、遺物も小片ではあるが比較的多くみられた。

地籍名の火振原は調査区の斜面を登りつめた頂部の原であり、遺跡の端部をわずかかすめただけである。

飯田垣外遺跡同様に遺跡の中心をはずれて本道路が通過したことは幸いであった。

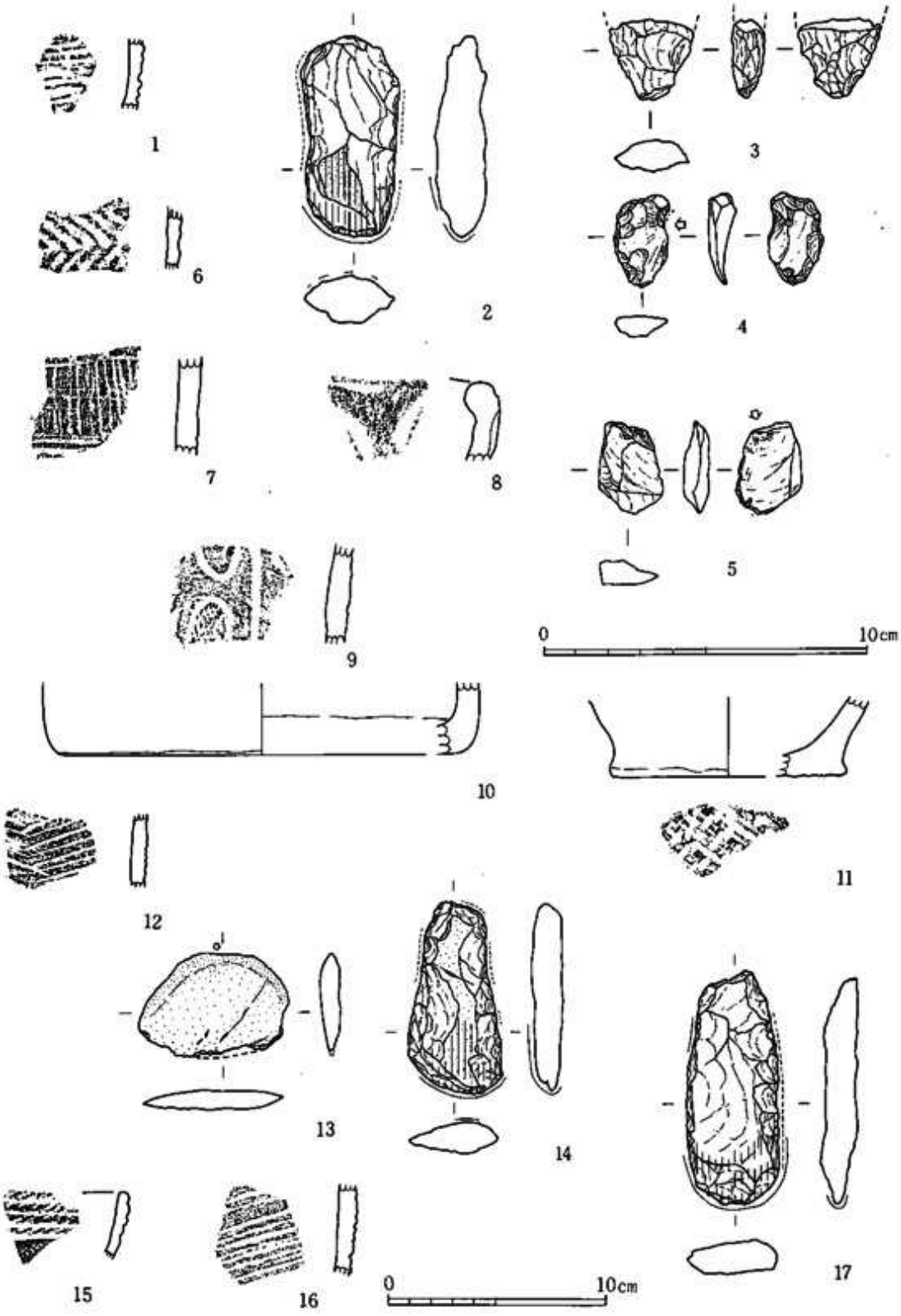
梅ケ久保遺跡においては、ほぼ中央の凹地を境に地層が大きく変わり、遺構が検出できるのは北東側に限定された。弥生時代住居址・縄文時代土坑を検出し、付近に古墳のあった記録もあり、縄文時代～古墳時代にかけての集落の一画を本道路が通過したといえる。又飯田下伊那地方での出土が稀な、縄文時代中期中葉藤内Ⅱ式に比定される深鉢形土器は、破片であるが優品である。同時期に比定される平出Ⅲ類A式の破片も出土しており、該期住居址が付近に存在する事は確実であり、今後の開発に伴なう破壊には充分な配慮が必要であろう。

今回調査を行なった遺跡のいずれもが山麓に接した立地を示すもので、伊賀良地区及び飯田下伊那地区における同様立地遺跡の調査例がほとんどなく、今回の調査において新しい知見を得ることができ、今後の学術研究等に果す役割は多大であるといえる。

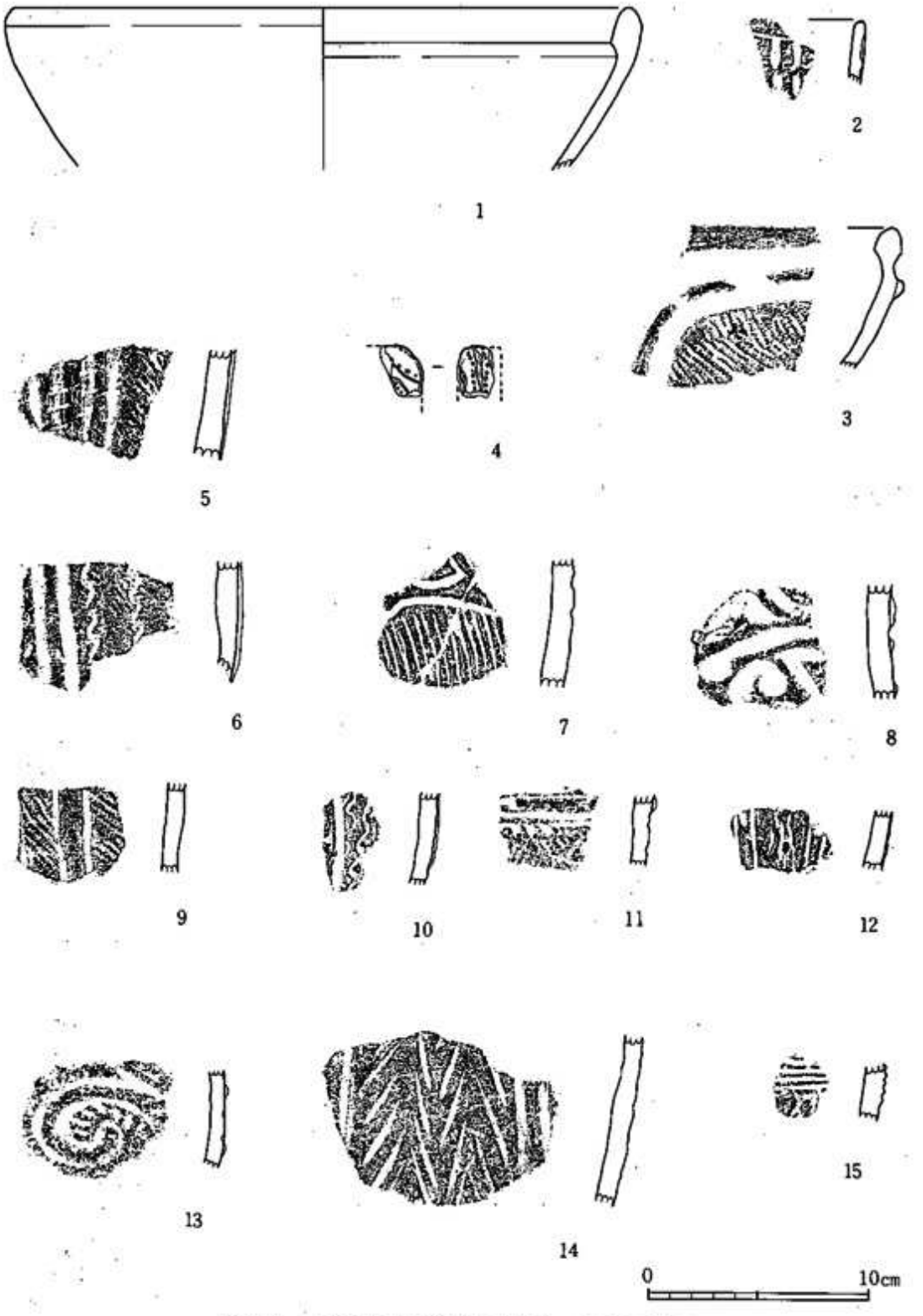
具体的には当地方に類例の少ない縄文時代中期中葉の集落立地の問題、縄文時代後期及び晩期にかけての伊那谷全体での遺跡分布もしくは集落立地の問題、高位の寒冷地における弥生時代から古墳時代にかけての集落形成等々今回調査遺跡及び同様立地条件下の遺跡の様相が具体的に示され、中・低位段丘上の遺跡状況も含め総合的に判断することにより地域全体の歴史的事実が明らかにされるといえる。

（佐々木嘉和・小林正春）

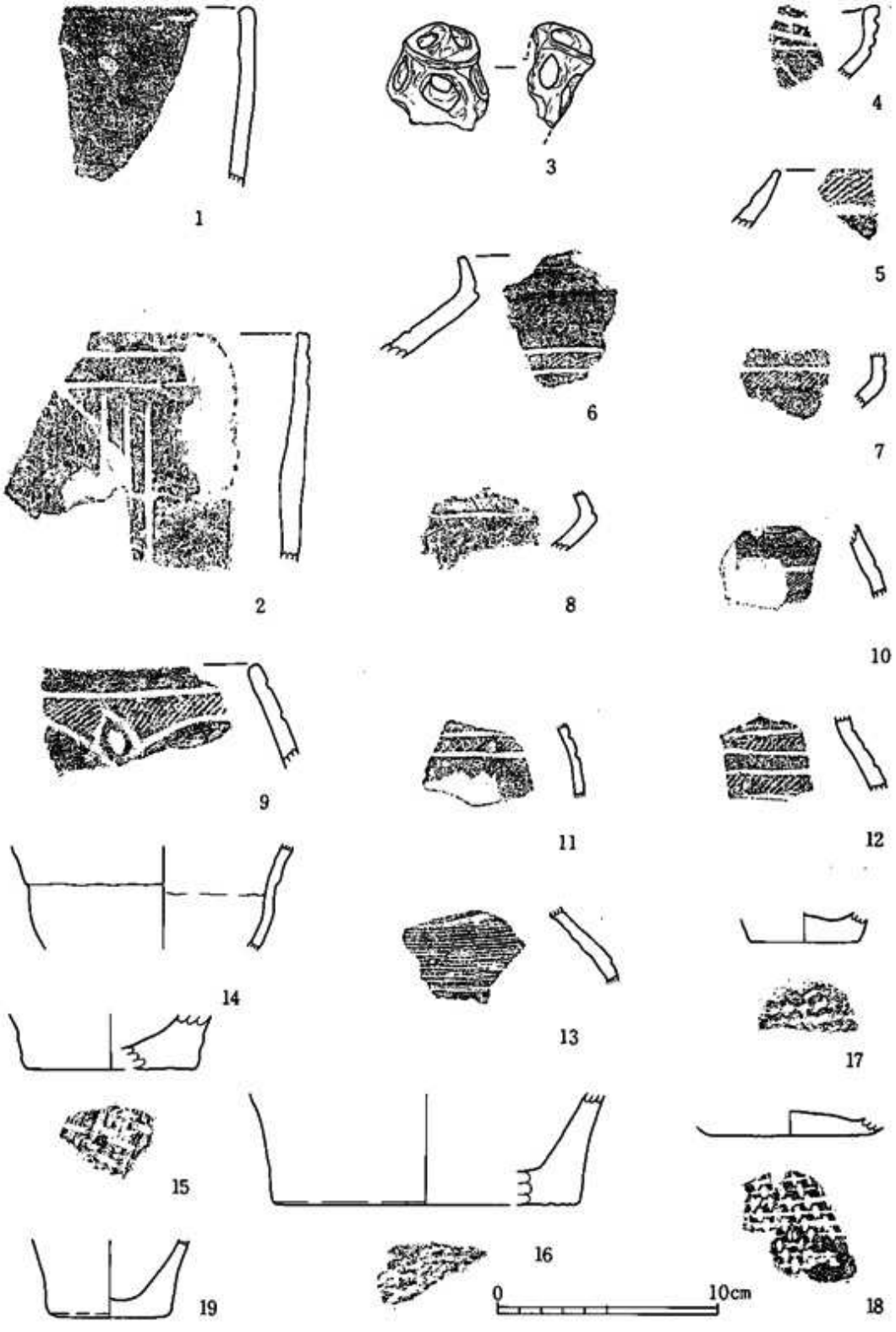
図　　版



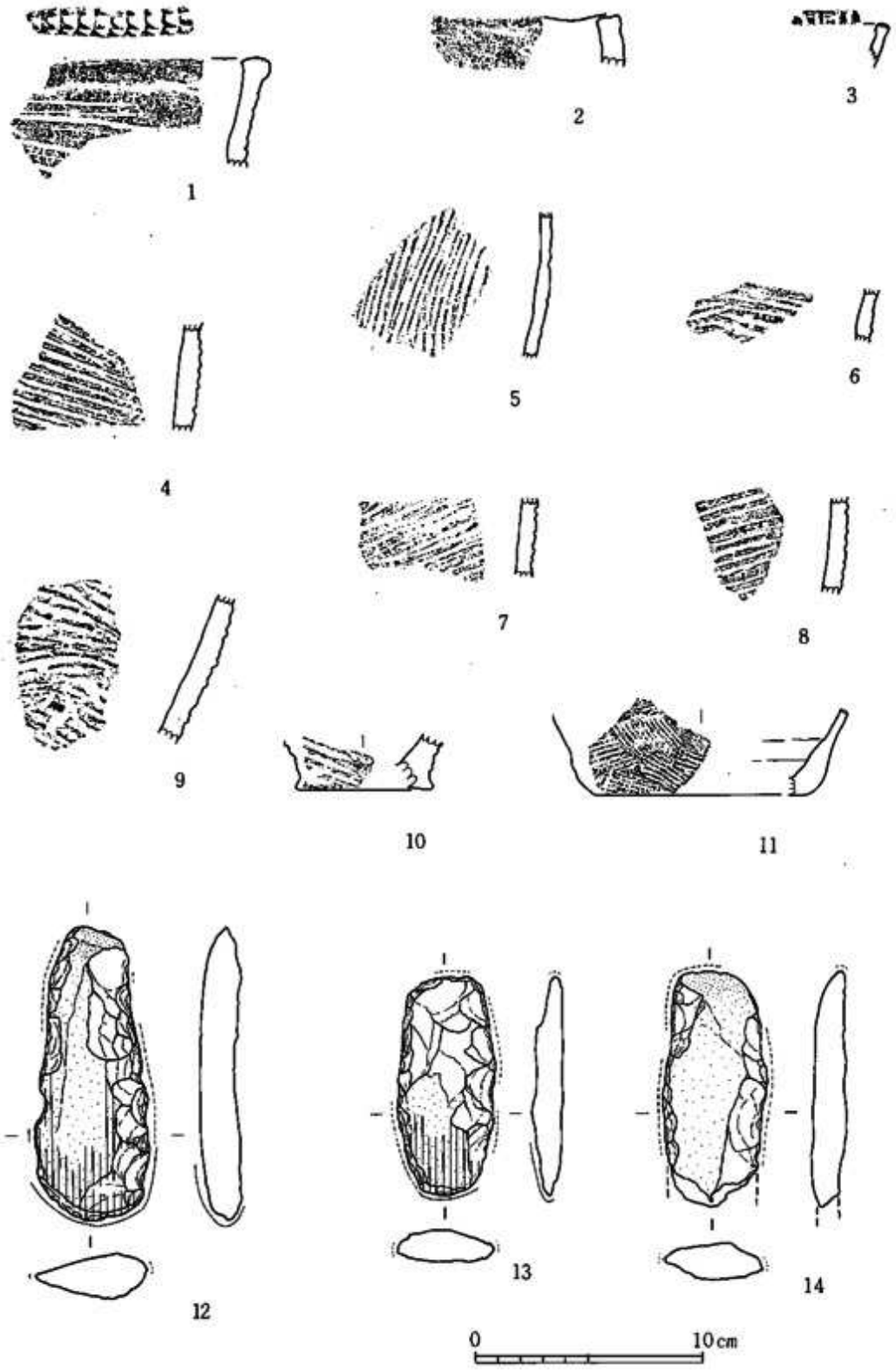
第1図　火振原遺跡土坑3（1～5）溝址1（6～14）溝址2（15～17）



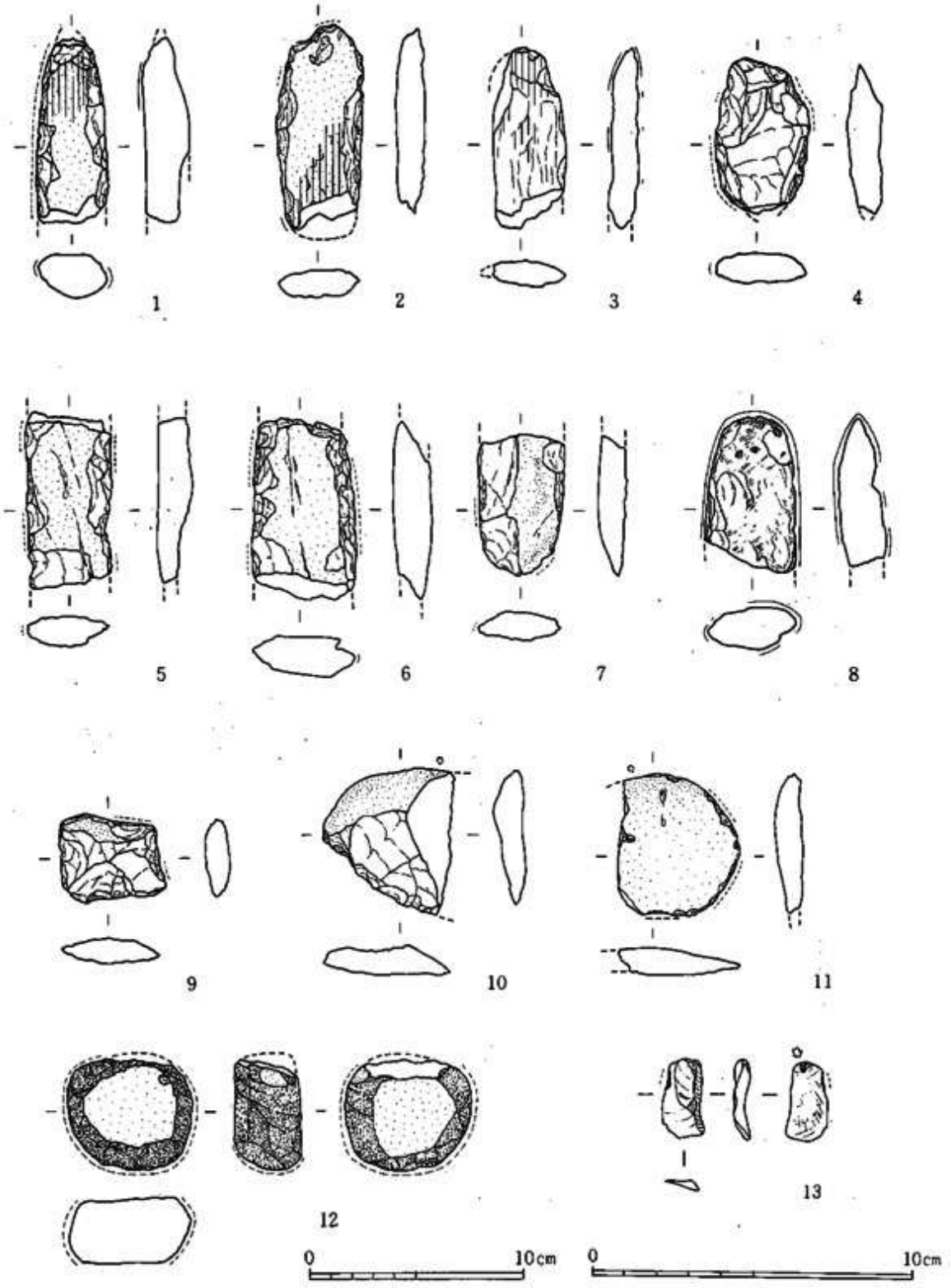
第２図　火振原遺跡遺構外出土土器　縄文時代中期



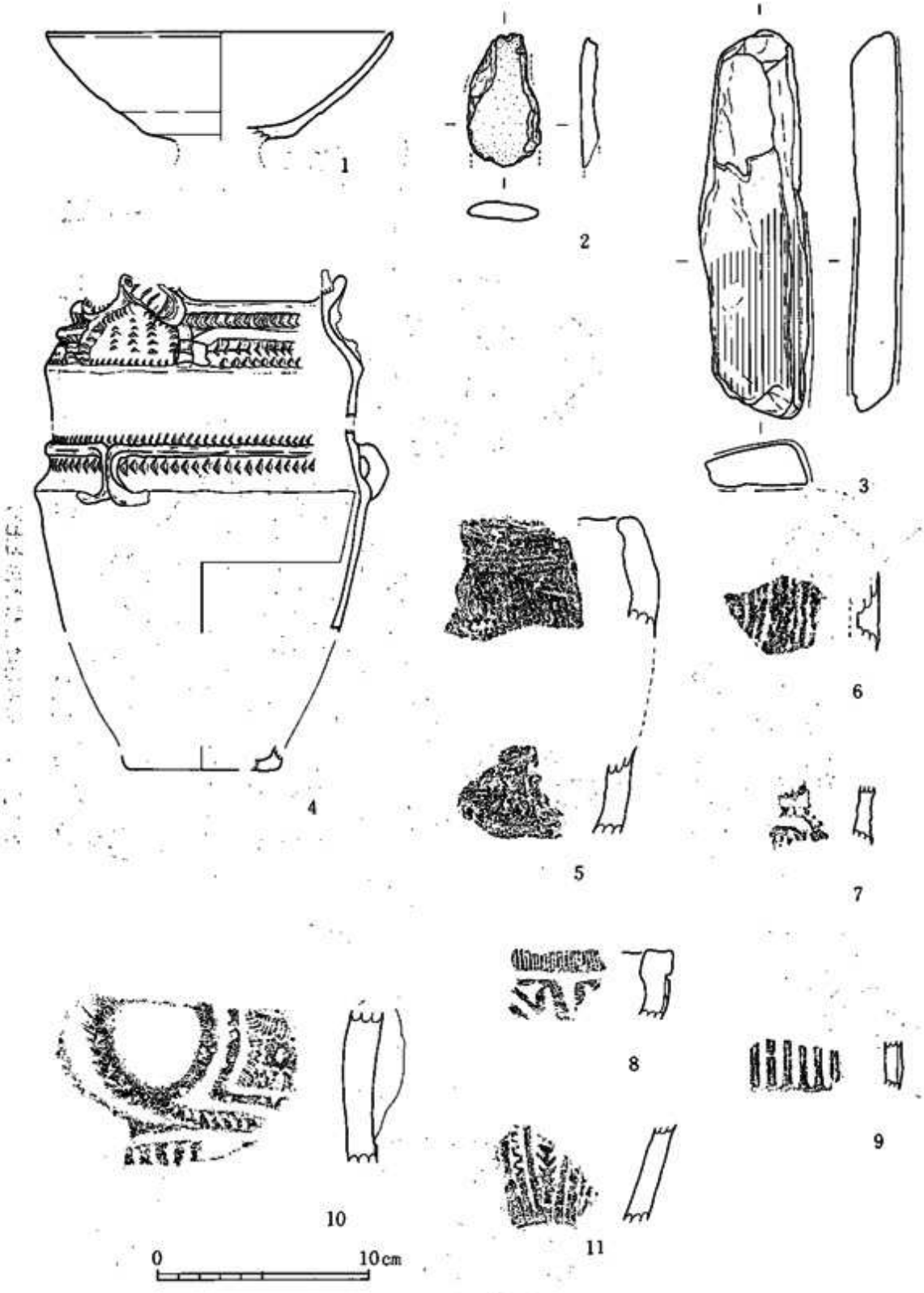
第3図　火振原遺跡遺構外出土土器　縄文時代後期



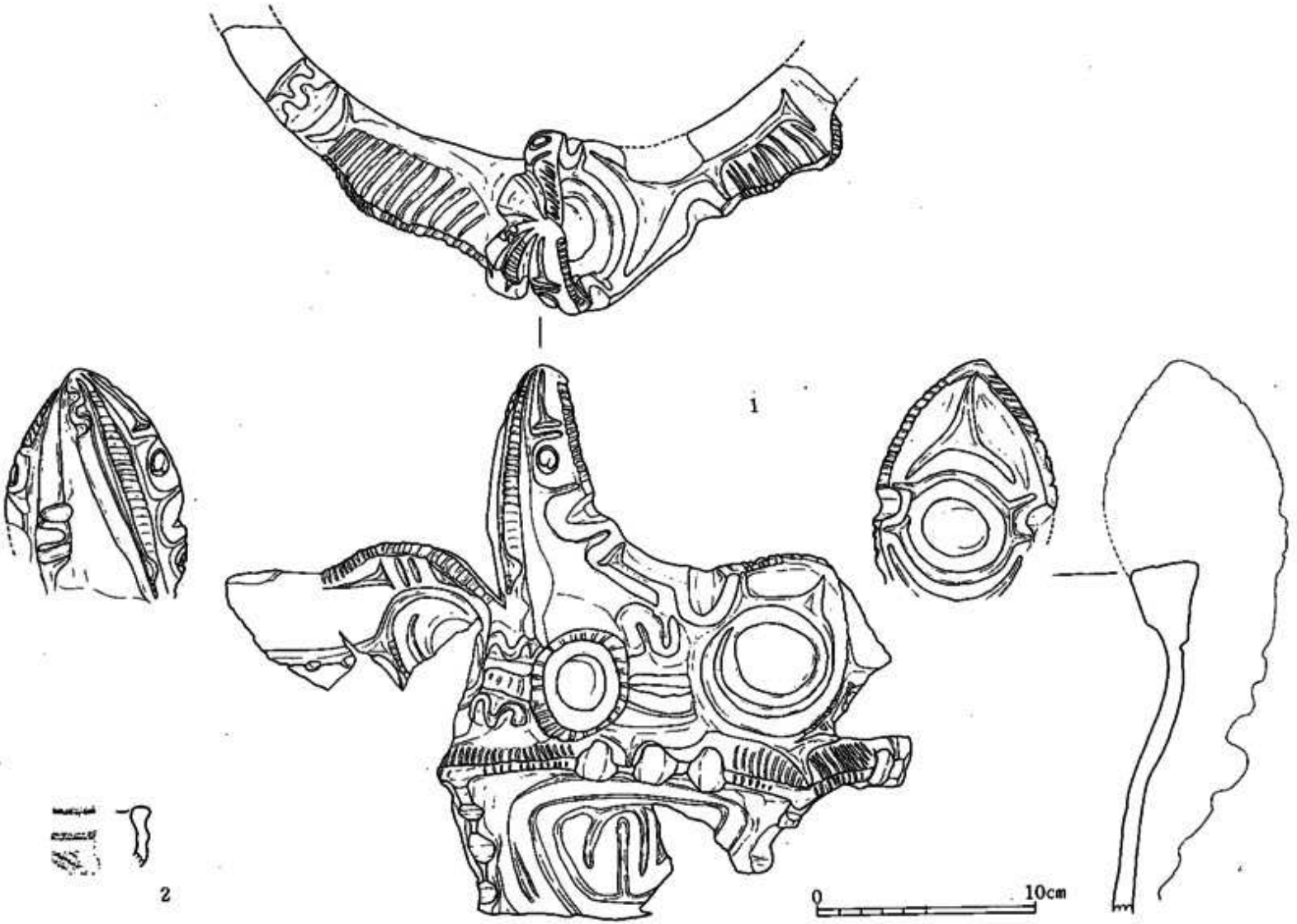
第4図　火振原遺跡遺構外出土土器・石器　縄文時代晩期（1～10）不明（11）



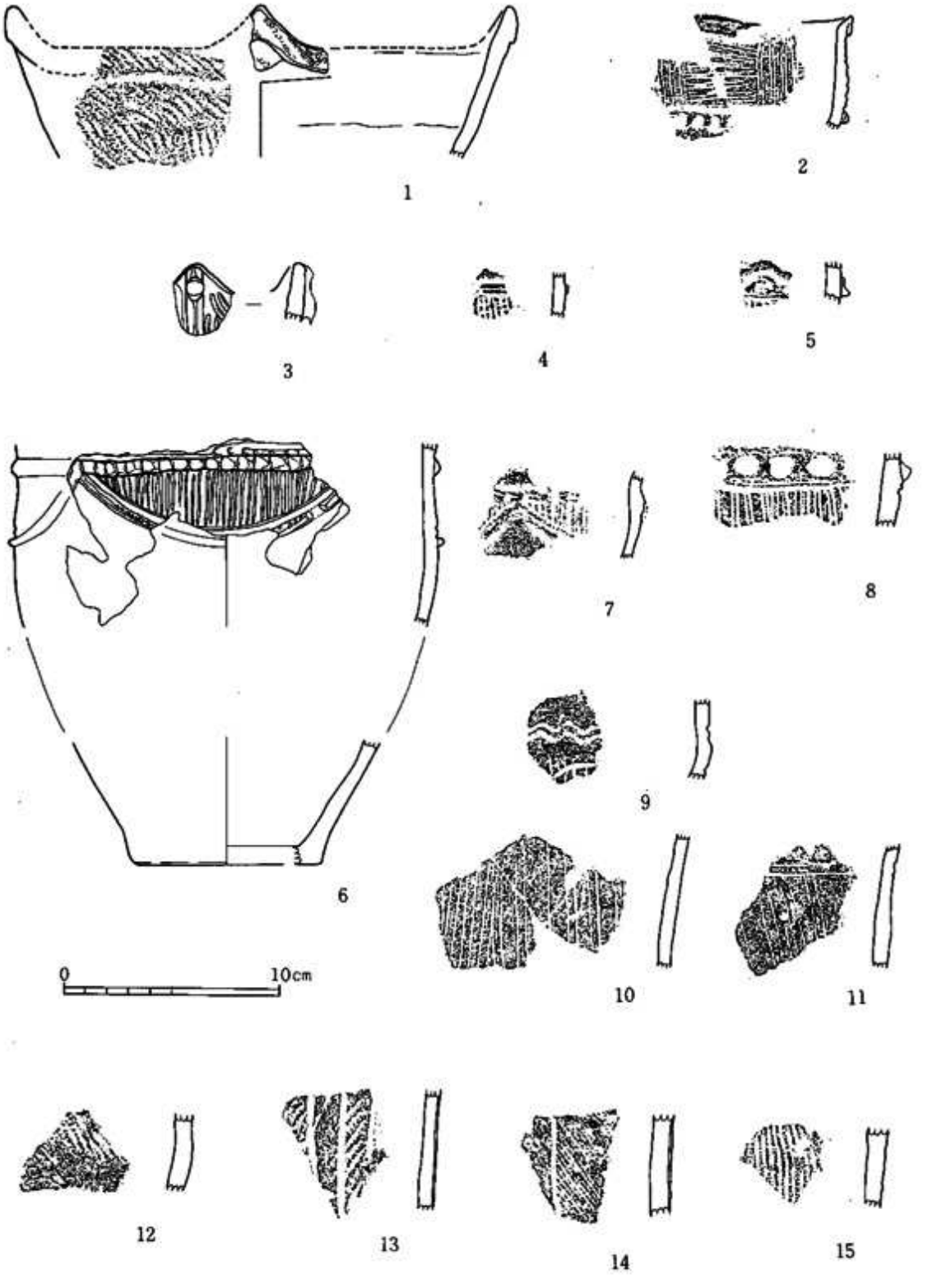
第5図　火振原遺跡遺構外出土石器



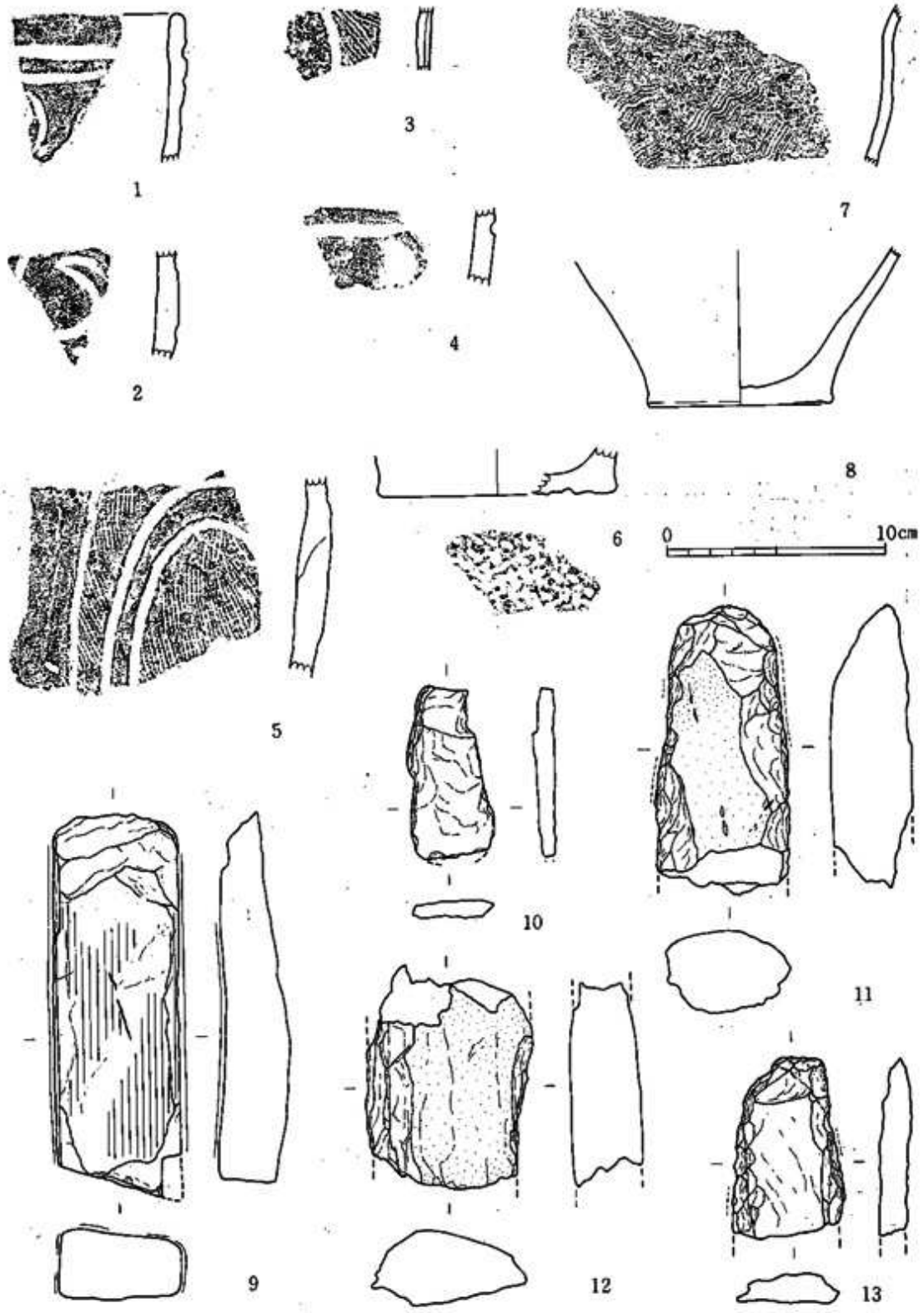
第６図　梅ケ久保遺跡１号住居址（１～３）土坑１（４）出土土器・石器
遺構外出土土器　縄文時代早・前期（５～７）中期中葉（８～11）



第７図　梅ケ久保遺跡土坑２出土土器



第８図　梅ケ久保遺跡遺構外出土土器
縄文時代中期　中葉（１～11）　後葉（12～14）



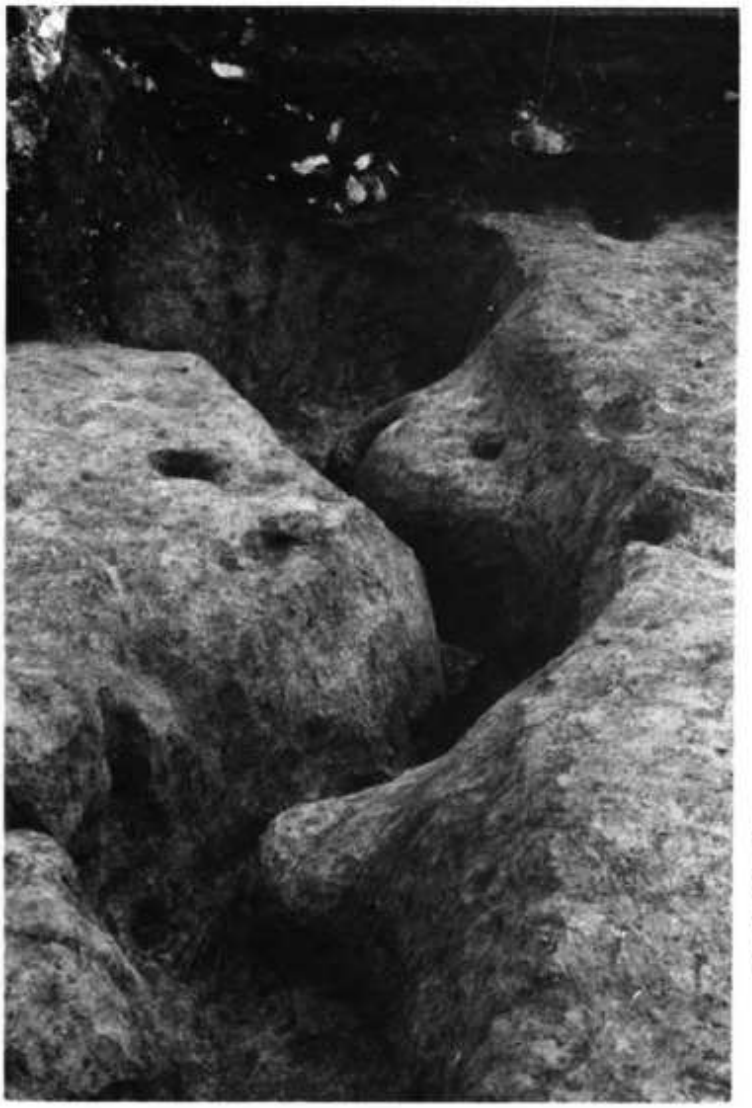
第９図　梅ケ久保遺跡遺構外出土土器・石器　縄文時代後期（1～6）
弥生時代後期（7・8）砥石（9）　打製石斧（10～13）

写　真　図　版

図版 1

飯田垣外遺跡遠景

火振原・梅ケ久保遺跡遠景



火振原遺跡溝址1

溝址1屈曲部

図版 3

溝址1土層断面

火振原遺跡溝址2

火振原遺跡土坑 1・2

火振原遺跡土坑 4

図版 5

梅ケ久保遺跡１号住居址

梅ケ久保遺跡土坑１

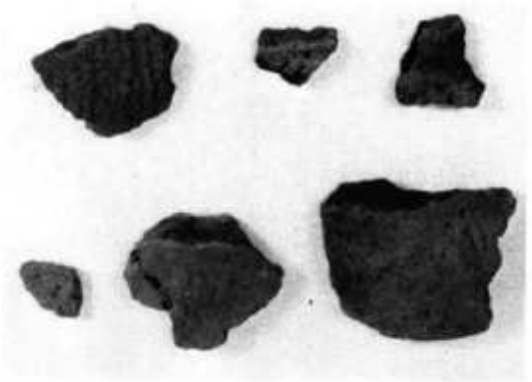
梅ケ久保遺跡弥生時代後期土器出土状況

梅ケ久保遺跡縄文時代土器出土状況

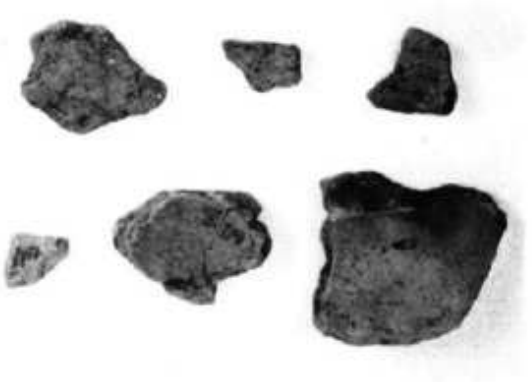
図版 7

火振原遺跡トレンチ状況

火振原遺跡土層状況



縄文時代早期末土器（表）



（裏）

縄文時代中期土器

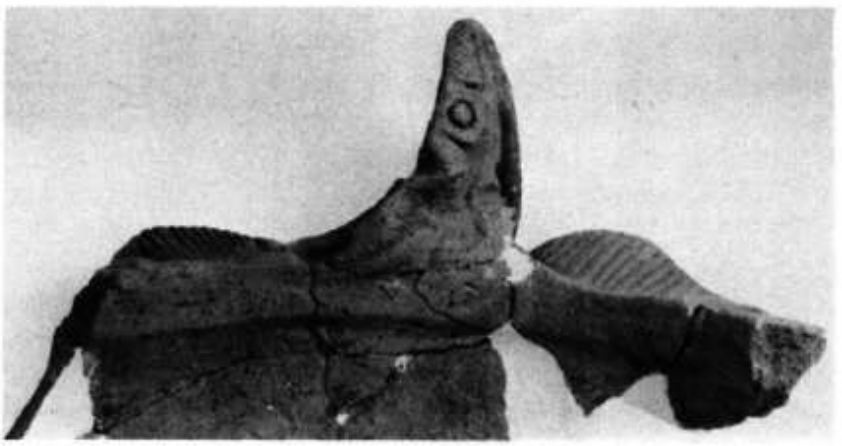
梅ケ久保遺跡出土土器

図版 9

把手側面

把手上面

把手裏面



梅ケ久保遺跡出土縄文時代中期土器

梅ケ久保遺跡出土縄文時代
中期土器

（1 土坑1出土
2～5 遺構外）

図版11

火振原・梅ケ久保遺跡出土土器

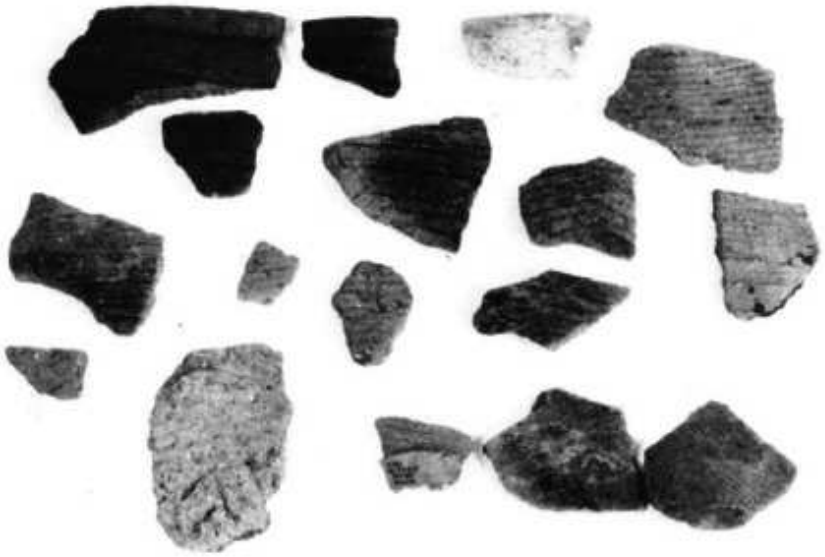
火振原遺跡出土
縄文時代中期土器

火振原・梅ケ久保遺跡出土
縄文時代後期土器

火振原・梅ケ久保遺跡出土土器

縄文時代後期土器底部

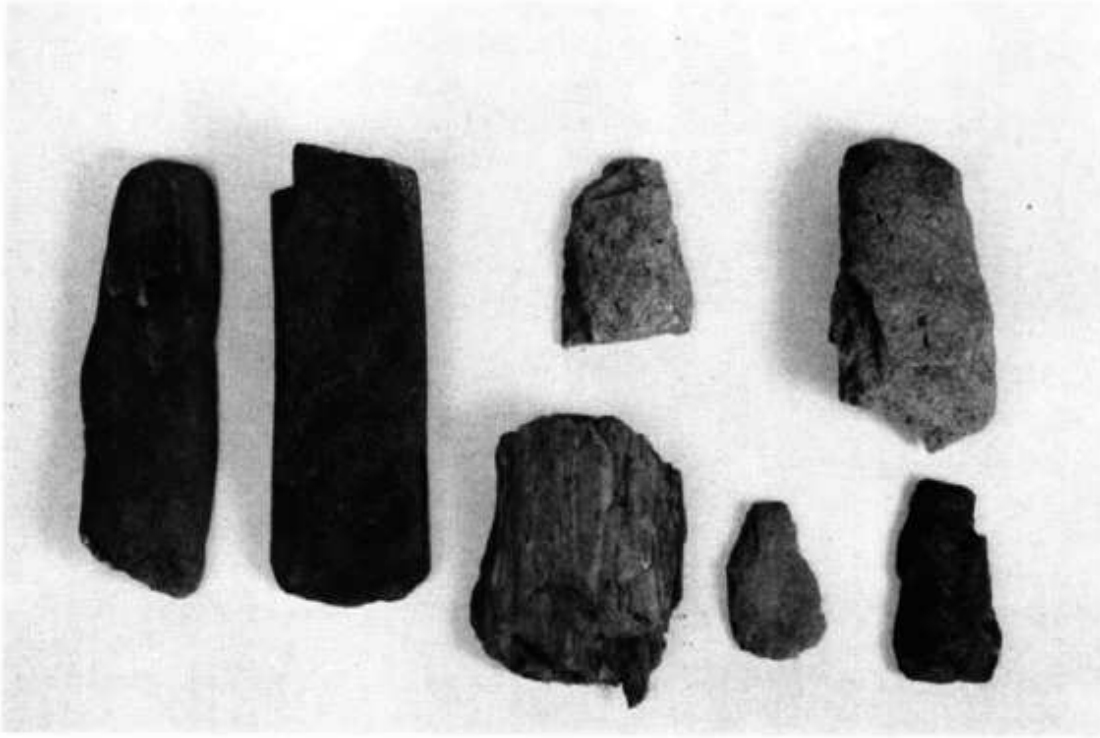
縄文時代晩期土器



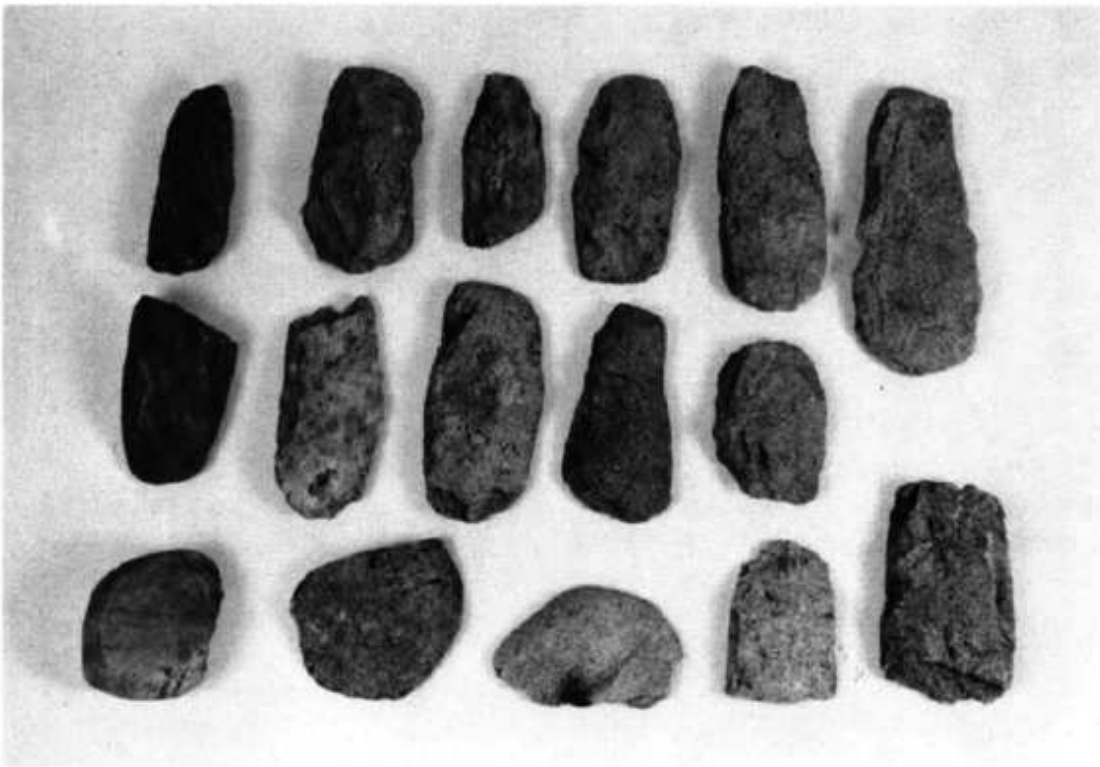
弥生時代後期土器片

同底部

図版13



梅ケ久保遺跡出土石器



火振原遺跡出土石器

飯田垣外遺跡調査風景

火振原遺跡調査風景

図版15

火振原遺跡調査風景

火振原遺跡調査風景

梅ケ久保遺跡調査風景

梅ケ久保遺跡調査風景

農林漁業用揮発油税身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

飯田垣外遺跡
火振原遺跡
梅ヶ久保遺跡

昭和62年11月10日　印刷
昭和62年11月20日　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印　刷　㈱飯田プリント